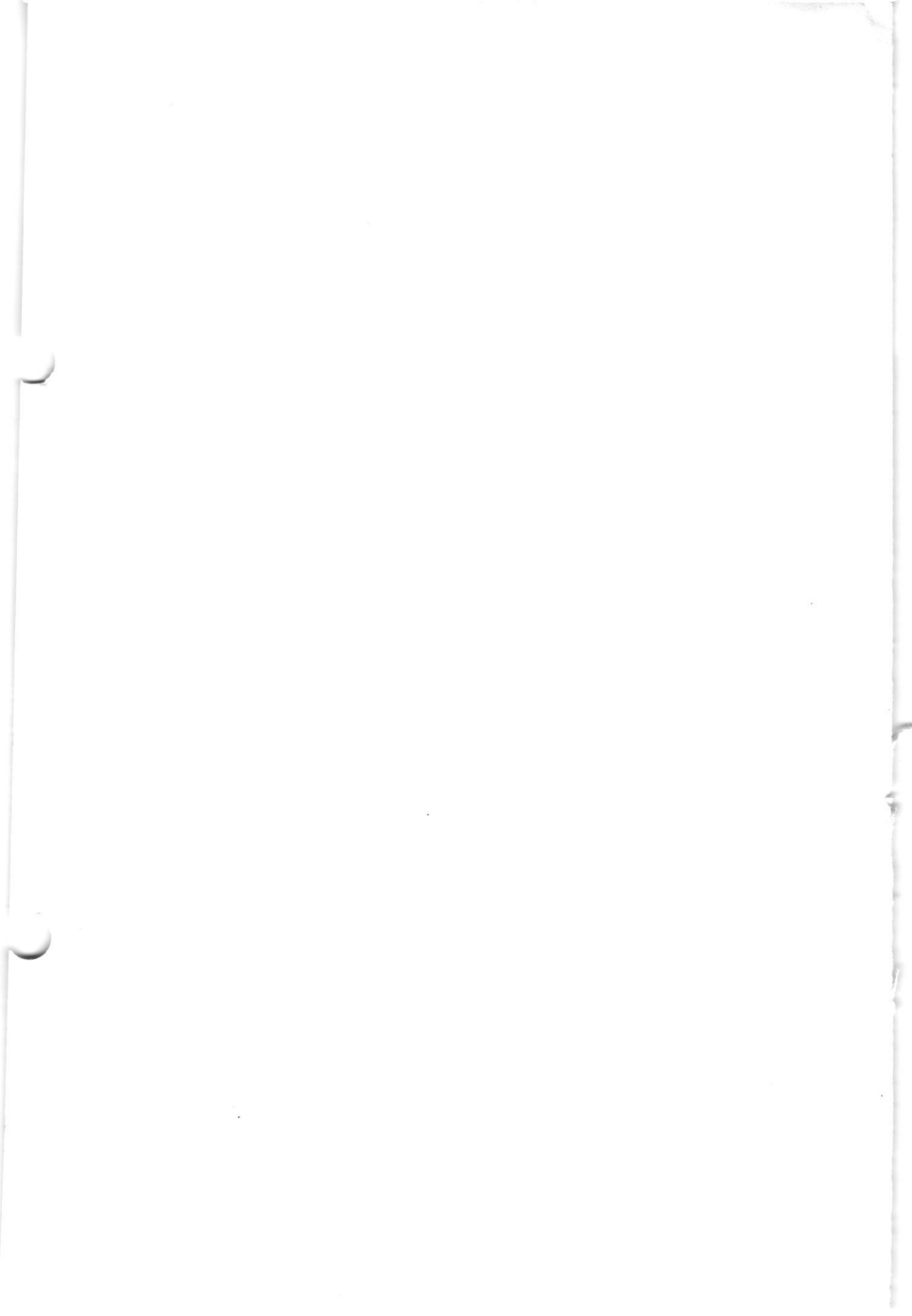


我が心の豎琴

喜寿編





## 序にかえて。

本年三月下旬日産労組より、何時もの定期刊行物と異なり、私当てに一通の手紙を戴いた。それは労組より送られる喜寿の祝いの品定めの間い合わせであった。確かに此の五月の誕生日で私は七十七歳の喜寿になるのであった。朝の目覚まし時計に起こされた時の様に、その時私は現実の自分の姿に立ち変えされていた。

七十七歳、自分が其れだけの歳であると言う実感は、殆ど無かったのである。

その手紙を戴いてから、じわじわと喜寿の実感が湧いて来た。《良くも生きながらえて来たものである。》と言うのが実感として何となく掴まされた感じである。

子供達からも、喜寿のお祝いに何かしようと言う問い合わせがあった。私の気持ちからすれば、そんなに実感が湧いて無いのに、お祝いを貰うのは何となく心苦しいのであるが、現実はその時が迫っているので、区切りとして、七十歳の時に子供達が祝ってくれた、私の自分史と随筆らしいものを纏めて一冊の本にした

『我が心の豎琴』の続喜寿編として書くかと思った。こうしておけば米寿、白寿の時にまた記念品をもらっても、続米寿、続白寿として書けるのである。

そこまで生きているのかと言われそうな、誠に大それたずうずうしさであるが、百歳を越えた母の歳まで生きていても困らない訳である。

それまでますます感性を鋭くして、『孫をたずねて海外へ』とでも言うのを書いて見たいと、夢はますます増大するばかりである。そしてそれまで家内を始め、子供達孫達、そしてその子供等も、皆元気で祝ってくれたら、最高の喜びである。ともかくも此の歳まで働かして戴いて、貧しい文章でも残せるという事は、私にとって最大の喜びであり、また皆様に読んで戴けたら、そして孫達が大きくなった時に二十一世紀の始めに、この様な人間も居たのだと思って貰えたら望外の喜びであり、感謝にたえない事である。

巻頭言らしからぬ文章になってしまったが、夢多き者の描く心の実写アルバムと、何とぞお許しをお願い致したい。

# 我が心の豎琴 喜寿編

## 目次

序にかえて

出会い

平和への龍灯

富士山を見て地球を知る

支え支えられる

砂の上の家

草花に学ぶ

時の流れに身を寄せて

今日は人の身明日は我が身

小浜島 探索記



出  
会  
い



## 『出　　会　　い。』

「あれ！向こうを歩いているのは、柳沢のおじいちゃんじゃないか？」

もう十数年前の話である。東京が生まれ故郷とはいえ、富士市の人間になった私は、お墓参り等に一年に一回位しか東京に行かないのであるが、たまたま東京駅の八重洲口より丸の内側へ通ずる道路で、向う側を歩いておられる吉原教会の柳沢さんにお会いしたのである。瞬間的な擦れ違いでお話する事は出来なかったが、確かに柳沢のおじいちゃんであった。東京二十万都市の中で、たまたま出掛けた田舎者の私がお会いするなんて、何と偶然の巡り合わせかと、一人驚いていたのを思い出す。

又これも十年ばかりの時が経つが、私達夫婦にとって初めての海外旅行で、米国のロサンゼルスに旅した時の事であるが、その「リトル東京」で、たまたま旅行でロスからカナダへ行かれる途中の、同じ町内で親しくしているご夫妻とお会いた事がある。時間が無くて二三分しかお話しが出来なかったが、あの広大な米国で、それも五、六分という時差があったら、会えなかったであろう事を

考えると、まさしく数学的確立で言えば、小数点の下に零を幾つ付けて表されるのか解らないが、私にとって驚きの出来事であった。

人と出会うという事、世界で何十億という人がいて、私はその中で一握りの人と出会うのである。その内一握りの人が私に感銘を与えてくれるのです。

一生の内で、何回か『この人は』と思う人に出会う事があるのです。自分に無いものを持っていたり、不思議な魅力を感じると、もっとその人を知りたい。もっとその人と接したいと思う事があります。自分はどうして、この人に魅力を感じるのだらうか、この人の自分を引き付けているものは、何なのだらうかと考えます。そしてその事が、今までの自分と全く異なった人生を歩むきっかけになる事すらあるのです。

私の人生に於いても、その出会いによって、少しづつ曲がり角が与えられてきた様に思います。特に心の打ちひしがれた時に出会う良き出会いは、私の人生を生き返らせる、大きな力になったのです。

良き出会いとは、真剣な心の出会いなのです。魂と魂が触れ合う出会いなのです。己を捨てた出会いなのです。恥も外聞も無い出会いなのです。その真摯な心が人の心を動かすのです。私の心を動かしたのです。私を動かした真実の出会いの中に、その人の『愛』を感じるのです。出会いによって生かされたのです。



ただ一人で生きるので無いという事を、多くの人の魂の祈りが注がれていることを、私の出会いは知らせてくれていたのです。

人の為に真剣になって祈るという事を、真剣になって考えるという事を、そして共に泣き、共に喜ぶという事を、出会いの魅力は真実の中にあるのだという事を、仮面を脱ぎ捨てた地肌にあるのだと言う事を、私が教えられた良き出会いの魅力であり、条件であった。

神との出会い、それは私にとって真に良き時に与えられた出会いであった。戦時中の全体主義に流され、「古事記」や「国體の本義」によって教育された私の心、いや「体全体」と言っても過言で無い私に取って、百八十度の価値観の違い、歴史感の違いに惑い驚き、生きる目的を見失った者に対する神からの救いであった。特に聖書に示された『真実の愛』の神髄は、私に取って最も大きな出会いであり、私の人生に対する恵であり、指針であった。

先に述べた人との巡り会いにおいても、名も知れぬ多くの人々が私に示された行いや言葉の中で、心に残り私を生かしてくれているものは、聖書に示された『愛』に基づく行いであり、言葉そのものであった。

人は弱いものです。何か不幸な環境に置かれるとその渦のなかに溶け込んでしまい、押し流され様とします。冷静に自分を見詰められなくさえます。それから脱却さしてくれるのは、神との出会いです。神との祈りの出会いです。そして神の愛に基づく人との出会いです。

出会いの魅力と力は、そこにあるのだと思います。

出会いの魅力！ その不思議な偶然性、神のなさる業とはいえ、残り少ない命でも、それを求め、そして少しでも与えられる、日々の自分でありたいものである。

： 神との出会い、そして一握りの、真実の人との出会いを求めて、

私は今日も、また歩み続けたい。……！

平和への龍灯



隨筆 『平和への龍灯』 概要

大東亜戦争も苛烈になった昭和二十年五月から、八月の終戦になるまでの間に起きた体験と、心の葛藤を描いたもので、足の病気の為に戦地に行けなかった筆者が、戦地で戦って居る友と少しでも同じ思いに自分を置くべく、静岡県富士郡にある軍需工場に就職したが、一カ月で東京の実家が空襲で焼け、熱海で家族と共に生活することになり、戦時下の軍需工場の勤務と温泉町熱海での生活を体験する。

熱海での暖かな平和な日々を体験しながらも、工場を通じて戦う事を信じていた筆者が終戦の玉音を聞き、信じがたい自分の心の葛藤の内に、熱海の山に出現した家々のまばゆいばかりの平和な明かりに触れ、初めて心に真の平和をもたらされた物語り。

『平和への龍灯。』

十分停車を終えた蒸気機関車は、汽笛を一段と高く鳴らしながら、『ガチャン』と言う連結器の高い金属音と、思わず手摺りに捕まる程の衝撃を、客車から客車へと次々に移しながら、沼津駅を動き出した。破けた幌の連結器のそばに乗っていた私は、その衝撃音に引きつられる様に我にかえり、破れから見える線路の玉石が、徐々に速度を増して行くのを、じっと見つめて立っていた。

『丙種合格とする。銃後で確り頑張ってほしい』と、老いた徴兵検査官の言われた声が私の耳に蘇えて来た。足に補助機を付けての徴兵検査では、覚悟していた言葉とは言え、この短い言葉が、直立不動の私の頭から足の先まで、重くのしかかった言葉ではあった。同じ日徴検査を受けた小学校の同級生たちは、殆どが甲種合格であり少数の者が乙種合格であった。戦時中の事であり乙種合格でも、殆どがやがて戦地に赴く運命を背負せられた者たちであった。

旧制中学二年の時体力検定を受け、俵担ぎで捻挫した左足首の骨についてしまった結核のため、膝から下ギブスをつけての三年間の松葉杖生活、早く直る為に手術することは、足首を切断する事だった。私にはそれを受ける勇氣はなかった。

そして徴兵検査の時も足の補助機が取れない私であった。

赤い襷を掛けて婦人会の人たちに見送られて出征して行く若者達、送り行く万歳の声、その中に一人取り残された思いは、若かりし私には耐え難い声として響いていた。その思いを少しでも払拭し、そして戦地に出征した友とのせめてもの思いの通ずる場として、軍需産業を選んで就職への汽車の旅立ちである。なお、砲火をくぐって命懸けで戦っているであろう友と、少しでも近い環境に自分の身を置き、友と共にいる日々でありたいと言う願いでもあった。

しかし東京で生まれ東京で育った私が、初めて親とそして兄弟と別れ一人旅立つ感傷も、彷彿として沸き立って来る湯水のごとく、私には押さえ切れるものではなかった。

グレイター、ノドマークと言う名の小学校で唯一の米国人の同級生の子がいた。日本人と違い青い目が印象的に強く私の心に残っているかわいらしい女の子である。米国と敵味方に別れて戦っている現在、敵性民族としてどこでどうしているのかと、ふっと思い出す一瞬でもあった。

又、山が好きでよく山の話をしながら中学校まで共に歩ゆんでくれた、花田千秋という青森県出身の若い数学の先生がいた。私の大好きな先生であり、懐かしいその面影が浮かんで来るのである。

列車の速度と共にどんどん早く過ぎ行く線路の玉石の様に、心の中で回り出した『回り灯籠』は、その早さを増しつつ、頭の中にある断片的な事々を掻きさらって、思い出を鮮明に現わし、そして次々と浮かべてはまた、消し去って行った。

時に、サイパン島が落ち、グアム守備隊が玉碎し戦いがますます苛烈になり、東京の下町を始め、日本各地が戦災の惨禍に会いつつあった昭和二十年五月の始めである。

当時の静岡県富士郡吉原町にあるN社に勤めるべく、私の第二の人生の出発は、沼津駅を出た蒸気機関車と共に始まっていた。

吉原町にあるN社は平和産業から軍需産業に転換して出来た工場で、練習機と言おうか肉弾飛行機と言おうか、我々には解らなかったが小型飛行機のエンジンを作っていた。

工場の南側には、完成したエンジンの試験の為五、六台のテスト機が、四六時中耳をつんざく爆音をとどろかせ、回転するプロペラから出る強風は近付く者を吹き飛ばす強さをもっていた。

その響き渡る音の強さと、吹き出す風の凄まじさの中に、私は戦地の友と居る同次元の想いを密かに感じていた。



工場の中には学徒動員で遠くは甲府から、動員された生徒が生産現場で所狭しと働いていた。女学校出立の婦人挺身隊もそれに加わって、力仕事も厭わず「もんぺ姿」も甲斐甲斐しく作業していた。正に人海戦術そのものの生産態勢であった。

私が努める職場は、エンジンを作る機械工場のジグや設備を設計する職場で、学校時代に動員で働いていた京浜地帯の上陸用海軍舟艇のエンジン工場とほぼ同じで、大した不安も無く仲間の人達も良い人ばかりであった。

仲間には明治の元老伊藤博文の孫に当たる人も働いていて、学習院出身はさすが上品な振る舞いと、奇麗な言葉使いが目立つ人であった。

私が就職して一カ月、初めての給料を五月二十五日に戴いたその日である。父から東京青山にある私の実家が、二十三日の空襲のため焼かれたとの連絡が入ってきた。その頃は富士山を目当てにサイパンの基地からB29の爆撃機が黒い不気味な悪魔の様な格好をして南から現れ、迎える日本の戦闘機の挑戦や対空砲火を浴びる事も無く、暗い夜空に数拾機の編隊が、次から次ぎへと絶え間無く大空を覆う隊列となって、さながら自国の大空の如く悠々と我々の頭上を通り、そして富士山を目当てにして右旋回あるいは左旋回して、東京方面又は名古屋方面に

向かっていた。それは止める術を知らぬ、威風堂々たる姿と見ざるを得なかった。私は父からの知らせを受け、取る物もとりにあえず東京へのキップを手に入れる為、明け方の四時頃から、少ない一日の割り当て販売枚数の中から入手すべく、富士駅のキップ売り場の行列に加わっていた。私の手元には、赴任したのは五月からであったが、郵便事情が悪く四月採用の通知が届かなかった四月分の給料も合わせ、金九拾円が握られていた。公定相場給料は月四拾五円であった。

私の乗った汽車は、空襲を避け何度か停車しながらも無事東京新橋駅に着いた。汽車を降りると、電信柱は焼け落ち市電の架線は跡形もなく、市電はもとよりバス一台も動かず、見渡す限りの一面の焼け野原が私を待っていた。一度か二度の空襲が明治以来営々と築いて来た東京を、一夜に斯くまで変えてしまうとは、私にはとても想像出来る事ではなかった。一ヶ月前に私を送り出した家々の立ち並ぶ懐かしい東京とは、あまりにも異なった風景であり、実家のある赤坂青山高樹町まで歩いての里帰りである。木造住宅の多い町並みは塀やら垣根等焼けて全くなく、行く先々まで全部見通せる焼け野が原である。ポツン、ポツンとかすかに残った建物、それらは焼けた石作りの蔵がほとんどであった。

二十三日の空襲後残っていた所は、翌々日の二十五日の空襲で又焼けた様子で、

歩けば歩くほど実家に近付けば近付くほど、家族の安否が私の胸を痛みつけていた。

溜池、六本木、霞町、高樹町と起伏の続く美しい町並みであり、外国の公使館大使館も多く存在する町であったが、正に瓦礫の続く町々であり起伏である。青山と言う名のとおり、樹木の茂った町であり、蟬の泣き声も至る所で聞こえた町であったが、泣き声は勿論立ち木一本目にする事ができない町と化していた。焼夷弾で燃えるものはことごとく燃やし尽くされた廃墟の有り様を、嫌と言う程味わらされた道程であった。市電に乗って四十分位かかる距離を、夢中で歩いたせいか、見通せる所を近回りした為か、思ったより早い時間で我が家の青山高樹町十三番地に着いていた。父からの知らせによると、前の家が焼けないで残ったので、そこに住んでいるとの事であったが、家の回りは家一軒無い一面の焼け野原である。

わが家は二十三日に焼け、残っていたすぐ前の寿司屋の二階に移り住んでいたが、二日後の二十五日の空襲で移り住んでいた家も焼けた様で跡形無く、二十数年そして一ヶ月前まで住み慣れた我が家が、どこにあったか迷う程であった。

わが家の跡にたどり着いてみると、防空壕の焼けたトタンが動いて、中から母

や弟の顔が次々と出て来た。しかも火傷、切り傷ひとつしないで出て来たのである。

私が歩いて来たこの東京の一面の焼け野が原、焼夷弾の高熱に取り囲まれた中で生きていられるのか、不安一杯の中で歩んで来た私は、怪我一つもせぬ親兄弟と会えたことは、正に奇跡としか思えず生涯で最もうれしい時であった。二㎞程離れた所にある根津邸の広い池のほとりに避難し、降りくる焼夷弾を防いでいたとの事である。狭いわが家の庭にも二、三発の焼夷弾が落ちたとの事であった。正に物量作戦である。幸いわが家族は皆無事であつたが、店という店も無く、とても生活できる状態でないので、早速会社の厚生課に頼むと、熱海の家族寮を貸してもらえ事になり、文字通り着の身着のまままで熱海に移り住むことになった。

当時の社会構成は功勞の有った者に公侯伯子男と五つの爵位が残されており、貴族院はそれら爵位の有る人たちで構成されており、議會も貴族員、衆議院の二院制で構成され、我々平民との身分制度の残る時代ではあった。東京の実家の地主は高木子爵で、昭和天皇の弟君の三笠の宮の妃殿下の実家でもあった。わが家とは百mと離れていない距離であつた。そのころの会社組織の中にも社員と工

員の身分の様なもあり、また一般会社組織の中にも多く残されていた。N社の場合、社員には金モールの帽彰がついた帽子を支給され、一目で解る様な形態でもあった。社員の資格で入れた私は、運よく社員寮が空いており、一カ月勤務の新入社員にも、会社は豪華な熱海の社員寮を貸してくれていたのである。

父は神田の出版社に務めがあるので東京に残る事として、私と母と弟二人の四大家族での生活が始まった。十畳位の部屋二つがわが家の全面積である。しかし二度も戦災にあったわが家には広すぎる空間であった。寮は四階建ての立派な元旅館であり、部屋には玄関らしい土間があったが、炊事をするところは無く、廊下の一隅が共同の炊事場であり、トイレも共同の状態であった。鍋釜一つ持たぬ私たちに、隣の部屋の課長の奥さん等が気さくに早速鍋釜など貸し与えて下さったり、買い物に付き合ってくださったり、五十年住み慣れた東京を離れざるを得なくなった母に取って、人の親切が何物にも変えがたい身に染みる日々であった。また氣丈夫な母ではあったが、地の縁人の縁と、私よりはるかに思い出の多い母に取って、東京青山を離れた事はことさらに、寂しかったのであろうか、涙を垣間見せた事があった。

東京の家は明治の時代に建てたのか、電灯の引かれる前に使われていたであろ

う『ガス灯』の配管が屋根裏に残る旧家であり、また父たちが嘗々と苦心して建てた貸家も、たった一夜の空襲で廃墟と化してしまったのである。母に取っては耐え難い悲しみの出来事であったのだろう。国と国との戦いとは言え、武器をもたぬ一般市民がもつとも被害が多いと言う矛盾した現象が現れていた。平和を壊して命を奪い戦うと言うこと事態が、矛盾した行為であったのである。

でも軍国主義に教育された私は、正義の戦いとして東洋平和の聖戦として、個人の生命の貴さ、財産等考える暇もなく、戦いは悪だとは、少しも思っていないかった。

伊豆北部に位置する観光都市熱海、私は今まで泊まりに来た事は一度もなかった温泉町である。会社の寮は熱海中心部の市役所のすぐそばで、熱海駅からだから坂を下って約二十五分の位置にあった。熱海駅を降りると温泉を流すパイプがあり、また使用済みの温泉をながす側溝があるせいか何となく暖かな道並である。家族と共に在る喜びがもたらすものか、駅からの下り坂がなす自然現象なのか、独りでにわが家に向かう足取りは軽く、私に取っては何となくらんらん気分であった。真っ先に寮についた者は、入り口にある5cm位もある温泉のバルブを開いて家に入る習慣になっていた。私は油が切れて重くなったこの温泉のバル

ブを開く事が、何となく喜びを感じる一瞬でもあった。他愛のない行為ではあるが、その中に今日一日生きていた思いが沸いてくる瞬間であり、熱海に帰ったと言ふ実感を感じる、喜びの時でもあった。

とうとうと流れ出る湯は、家族の女衆が洗ってくれてあった広い湯船をたちまち満たし、白い湯気を立てて私たちを待っていた。

会社勤めの私たちは真っ先に風呂に入れる特権が与えられていた。元旅館だったせいで、共同で入るお風呂は広く、並々と流れ溢れる温泉は、満員電車のデッキに捕まる通勤の疲れも充分に流してくれていた。男女の入浴時間の区別はあったが、一列車遅れたりして、まごまごしていると女性がどんどん入って来て、独身の私をどぎまぎさせられる時もあったが、温泉地では男女の混浴は当たり前みたいになっているらしかった。お風呂に入って居る瞬間はまさに戦時中を忘れさせる天国であり、身も心もリラックスできる時であった。勿論、熱海と言えどもたまには空襲警報も鳴り、電灯には暗幕をして狭い面積の灯かりの下での生活である。防空壕の設備らしいもの何一つ無い寮では、風呂に入って空襲警報が鳴ると裸のまま死ぬのは、みっとも無いと衣服をまとう位であった。

東京では昭和二十年始めには、空襲による類焼を少しでも少なくするために、

所謂家屋疎開が始まっており、外壁を取られた柱だけの家を、隣組総出でロープをかけて引き倒していたが、熱海もご他聞にもれず、我々のくる少し前に旅館を含めた強制疎開があったらしく、寮のすぐそばには通称『ふかし場』と言われる場所があった。それは家屋疎開した旅館の温泉の噴出口に台を作って、その上にセイロが置ける様になっていゝるものであった。セイロの中身は各家庭でふかして食べる材料が入っており、買い出しに行つて手に入つたお芋やら、お米の変わりに配給になつた豆類、等々千差万別の食料であろうと思われるが、布巾で覆われたセイロの中身は勿論知る由もなかった。そして置いてある人のセイロの上に、自分のセイロを重ねて行くのである。拾段位重ねてゐるときも時々あった。そして家に帰り出来上がった頃取りに行くのである。自分のセイロの上に同じ様なセイロが更に重ねられてゐるので、名前が書いてない限り自分のセイロを見いだすのは不可能に近かつた。管理する人は居らず自主的に使われており、そして一銭もお金は取つてゐなかつた。屋根のない狭い所ではあつたが、のどかな良き時代を思わせる『ふかし場』ではあつた。『ふかし場』は夜も昼も噴出する温泉と共に、二十四時間フル稼働で働いてゐた。

でも何度か行つてゐる内に回りに古びた椅子が置かれ、利用してゐる人は蒸し上



がるまでそばに居てもって帰るしきたりに変わっていた。推定であるが食料事情が悪くなり、無くなる事が出て来た為と思われる。

でも戦時下の生きるか死ぬかの時代に、熱海で無ければ考えられない風景がそこに存在しており、戦災で家を焼かれ肉親を失って、ぎすぎすした眼をしていた東京の人たちを知っている私に取っては、まさに平和を先取りした風景であった。さて朝の通勤であるが、駅までの登り坂を二十五分、熱海吉原間の汽車通約一時間、吉原駅から会社まで歩いて約二十五分が毎日の我々の日課になっていた。それも戦時下の本数の少ない汽車なので、我々はまず座って通勤したことは無かった。

私の勤務する部屋は、工場では一番高い階にある設計室であった。七月二十五日と覚えているが、アメリカの艦載機が一機吉原駅のそばの製紙会社の上空に飛来して、急降下しながら銃撃しているのがよく見えた。その下の人たちがどんなに恐ろしい気持ちで逃げ惑って居るかなどとの感情は沸いて来なかった。まるで映画を見ている様にガラス窓に皆が集まり急降下する艦載機を「格好いい」とはさすがに言う者はいなかったが、多少それに近い気持ちでいたのでは無いかと思われる風景であり、私たちの態度であった。

今銃撃を受けている製紙会社から我々の所まで歩いて二十五分の位置である。飛行機ならほんの一瞬の距離である。でもその見物の時は皆、自分たちに降りかかる怖さ等意識しない瞬間であった。それより銃撃する艦載機に見とれるのに夢中になる一時である。窓下に有る防空壕に誰一人として避難した者はいなかった。日本からの迎撃は飛行機は勿論、対空砲火も見する事はできなかった。

我々が成す術は無いとは言いながら、死線をさまよう人が居る此の現実を前にして、高みの見物とは、生きる貴さの意義とか、人を思いやる心とか、私たちは驚くほど希薄になっていた。そして死に対する恐怖心を押さえさす戦時下の教育に、私たちはどっぷりと浸かって居たのかもしれない。

ジュネーブ条約では、戦っている相手同士でも、銃を捨て降参の意志を示したら殺してはならないと言う条約があるという。武器を持たない相手、自分に少しの危険を与えぬ逃げ惑う市民を銃撃することは『悪』であると言う思い、いやそれが戦いの中で『正しい』のだと、恐らく米軍の銃撃手も考えていた事と思われる。無抵抗の者でも相手の国の者は殺すのが戦争なのだと、また殺されても仕方が無いのだと、何時の間にかそれらに疑問すら持たない我々の心に変えられていた。

真に戦争とは、勝ち負けに関係なく敵味方共、『神の愛』を踏みにじり、人間の心を変えてしまう『悪魔』の虜の恐ろしさを表徴していた。

その頃新聞を賑わしていた記事があった。戦いで捕虜になった敵兵を強制労働にでも連れて行く時であったのだろうか、その列を見て一人の少女が『おかわいそうに』と漏らしたたった一言について、多くの同胞が死ぬか生きるかの戦いをしている現在、不見識な言葉をはくなど大見出しで叩いていた。

そして盛んに賑わした標語は『此の一戦、欲しがりません勝つまでは』であった。一人の人間としての素直な感情も戦いの前に黙殺する時代であり、同胞の受けて居る銃撃を他人事の様に見ていた我々の感性も、とにかく私を含めて戦時下の荒んだ、曲げられた気持ちの現れ的一端ではあった。

さてそれから五日後の事である。会社に出社しようと熱海駅まで行くと、駿河湾北部に敵機が来襲中で汽車が不通との事、やむなく家に戻り待機することになった。熱海には敵機は一つも飛来せず、平和そのもので突然降って湧いた休日に戸惑い勝ちの一日ではあった。翌日出社すると、機械等を補修する工機工場の屋根は大きく破損し、圧縮空気を作るコンプレッサー室にロケット弾が落とされ、コンクリートに大きな穴が明けられていた。従業員の人は工場周辺のナシ畑に

にげこんで銃撃を避けた様であるが、襲いくる銃弾の音に正にクモの子を散らした様に逃げ惑う地獄の怖さを経験した様である。そして一人の犠牲者が出ていた。私たちは何も知らず温泉に浸かっていた時である。電話連絡もままならない戦時下とは言え、問い合わせもしない我々の感覚も、熱海の平和になれ過ぎていたのかも知れない。まさに今日工場がやられている等とは思ってもよらぬ事であった。

犠牲者の名前も葬儀についても、公には何も知らされ無かった。

幸い生産ラインの被害は少なく、翌日の生産は続けられており、テスト台の轟音と爆風は、痛みを覆い隠す如く、一段と強く響いていた。八月八日の事と

覚えているが、就業時間が過ぎて吉原駅に駆けつけて見ると、登り列車は二百分遅れと掲示してあった。各地の空襲により上り列車はほとんど定刻での発車は考えられない日々ではあったが、三時間あまりの遅れは慣れっこになっていた我々の感覚も、いささかうんざりであった。そして昨日の新聞に出ていた広島での新型爆弾は核爆弾によるものだ、だれ言うとなしに口から出ていた。軍部が秘密にしている情報も何とは無しに我々の耳に達していたのである。

列車の遅れ二百分は待ち切れないので、時々やる手で次に到着した貨物列車の連結器等に乗ったの帰途となった。勿論違法の危険な事ではあるが、駅員も

見逃してくれる既成の事項とはなっていた。ただ石炭を炊く蒸気機関車を先頭に  
して走って行く貨車である。丹那トンネルに入ると石炭の煤が煙と一緒に  
我々を襲ってくる。ちいさな煤でも汽車の進行で進む我々の顔には、相当の強さ  
でぶつかってくる、とても目等は開いていられる代物ではなかった。

それでも早く家に着きたいのである。そして真っ黒くなった顔を温泉の湯で流  
したいのである。まさに北伊豆熱海は我々の心のオアシスであり、体の憩いの唯  
一の場所であった。でもその平和な熱海にも、東京方面より多くの学童が疎開  
しており、三千名余りの子供たちは旅館やお寺に預けられ、平和時の観光旅館は  
疎開児で満ちていた。勿論親を離れての疎開である。集団生活に慣れない幼い子  
もいるであろうが、東京での焼け野が原を見ている私にとっては、熱海当たりえ  
の疎開は、恵まれている存在の様に思えた。父からの情報によると、私の卒業し  
た青南尋常小学校はその頃もう鉄筋四階建てであったが、焼けなかったので教室  
はほとんど戦災にあった人たちで一杯であって授業はほとんど行われていないら  
しかった。

また熱海の海岸近くにある病院は、戦地で負傷した白衣の軍人で満ちていた。  
私が熱海で見た軍人は戦闘服では無く、傷つき療養する白衣の軍人であった。正

に熱海は戦いの外におかれた恵まれた存在に近かった。しかし戦いは遠慮なく我々の生活に迫ってきた。日本全国同じだとは思っても、山に囲まれた熱海の最も不足したものは食料であった。配給米が大豆になり、乾燥バナナになって配給されていた。すぐ隣の駅の函南に行けばサツマイモなどが多少買えるのであるが、汽車のキップを買うのに半日掛りである。吉原までの定期を持つている我々は、月月火水木金金の歌にある様に、多くて月に二日位の休日ではあるが、背に腹は替えられないと、リックサックを持つての農家参りであるが、芋もおいそれとは売ってくれず、まして新参者の物物交換の物を持たぬ我々罹災者には、一片の芋も中々手に入らぬ時代であった。

課長も我々平社員も此の時は同じ思いの一日ではあった。誰かが戦争が終わったら、今に見ている今度は農家との戦いが始まるぞ、といったりしていた。

また一段と戦局が苛烈となり、本土決戦を決意した軍部が、熱海北方の山に陣地の壕を掘りだしたと言う噂を耳にしたのも終戦まぎわであった。殆どが勤勞奉仕で駆り出された動員住民の報酬は、一日タバコ三本と米五勺であった。

そして八月十日我々が会社に行つてからの事であるが、艦載機が熱海駅付近を機銃掃射して壺名の犠牲者が出てしまった。でも不思議なことに、東京では各自

の家に防空壕を掘り家族全員が非難する所を確保していたのに、熱海では余り防空壕にお目にかからなかったのは、私の認識不足のせいなのかそれとも平和に慣れた熱海の人たちであったのか、今だに分からないことである。

そして戦いが苛酷になった八月に入っても、戦闘服を着た日本の軍人をほとんど見ることはなかった。敵軍の上陸は千葉県の九十九里ヶ浜当たりとの想定のため熱海には軍人が回り切れなかったのかもしれない。

軍人を見かけぬ熱海、そこには日本としての軍事的価値もなかったのか、婦人会の竹槍突撃の訓練もなく、戦う意志も私には感ぜられなかった。『恋いごろも』に収められた長詩『君、死に給うことなかれ』を歌った熱血の歌人、与謝野晶子の愛した伊豆、そして熱海は、考えかたも人の心も、晶子の平和の血を引いていたのかも知れない。

八月十五日何時もの様に仕事をしていると、正午に総務課前の広場に集まる様に各職場に通達が来た。沖繩が全滅し、広島に長崎に原子爆弾が落とされた戦況より、いよいよ本土決戦に対する軍部当たりの重大決意が述べられるのかと思いつつ、工場長、配属将校並びに従業員全員が、正午のかんかん照りの広場に三々五々集まった。そこで聞かされたラジオからは、天皇陛下の一種独特の抑揚のあ

る御言葉が聞こえて来た。雑音交じりのラジオの声は後ろの方に居た私には良く聞き取る事ができなかった。ラジオが終わると配属将校が怪訝な顔をして工場長室に入って行くのを、私は印象的に見ており、五十余年たった今も瞼の中に残って居る忘れられない光景である。配属将校は軍需工場では、工場長以上に権限を持ち、生産に命をかけた存在であった。職場に帰るとだれ言うとも無しに、日本は敗れて戦争は終わったのだと言う声が流れて来た。でも私には到底信じられない事であった。古事記やら神皇正統記を教えられ、教育勅語、軍人勅諭で鍛えられた私たちの年代の者は、この位で簡単に降伏するとはとても考えられない事であった。一億玉碎が最後の手段だと私は信じていた。

そして良く聞き取れなかったラジオに、もどかしさを強く感じていた。学校時代に予科連に志願して赤い襷をかけ、全校生徒に送られて行ったあの友達の顔が、瞼の中によみがえて来た。戦争が終わり平和と言うものが私には良く理解できなかった。ともかく二六〇〇年の皇国の歴史の中で、敗戦ということは考えられない事であった。

戦いに敗れば、男は去勢され、女は犯される、という言葉がよみがえて来た。



翌日は出社しても仕事にならなかった。

そして全員が集められ工場長の挨拶があり、しばらく自宅待機をして欲しい旨の挨拶があった。学徒動員で来ていた生徒達は帰宅の準備を始めだし、我々も机の中の整理をししたが、とても手を付けられる状態ではなかった。

熱海に帰る汽車の中では、九州では終戦に反対し、独立して戦争を続ける等という噂が流れ、一種独特の雰囲気の流れていた。

昨日から今日まで、突然降って湧いた出来事に私もぼっかりと空いた心の空間を埋める手立てさえなく、先のことなど何にも考えられない夢遊病者の様な気持ちで、暮れるには少し早い熱海の町並を海の方に歩いていった。

普段はめったに歩かないのであるが、何時の間にか私は海岸通りを歩いていた。打ち寄せる波の音も私には用が無がなかった。

海の地平線がだんだん見えなくなり、やがて夜のとぼりが熱海の町全体を襲って来た。

山々に囲まれた熱海、夜ともなると普段は灯火管制で、真っ黒な山の稜線がすすかに分かるだけの真っ暗闇の熱海、その屏風のような山に一つ二つ灯火が突き出したのである。真っ暗の山の中に五つ六つ、数え切れない早さで灯かりがついて

行く。そして数分の内に囲っている山々に、まばゆい光りの星を輝かした如く、灯火は灯っていた。

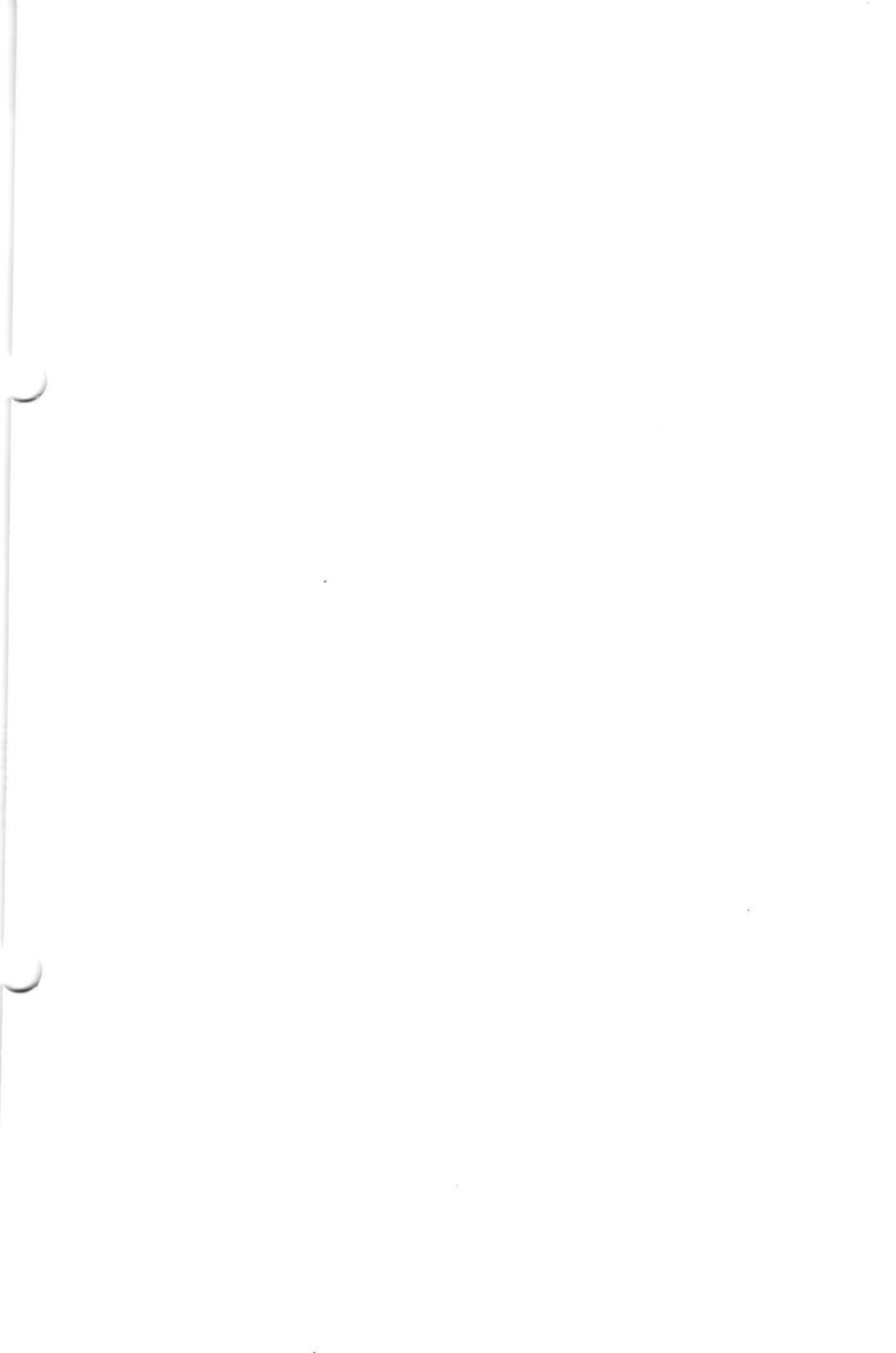
暗黒の山から、光りの山、光りの美しさとは……、生まれて初めて気が付いた様に私を襲っていた。灯火管制の黒い暗幕の取れた家々の灯かりが、正に平和を表すダイヤモンドの様に輝き迫って来たのである。気持ちの上では到底割り切れなかった私に、終戦、平和、という実感を私にもたらせてくれたものは、人の言葉では無く、暗幕の取れた家々の灯火であった。

そこには着飾ったネオンサインの輝きは無かった。戦いと言う恐怖から解き放たれた家々の安堵の思いと、戻されるであろう暖かな家庭の明かりとが、織り成して輝いているものであった。観光都市熱海ではなく、暖かい平和を象徴する熱海の姿を表していた。

そしてそれは敗戦を心の奥深くで否定し、今まで生きて来たバックボーンを、必死に守ろうとした私の心を、大きく揺さぶりぶち壊す光りであった。

暗黒の闇を破り、きらめく様に熱海の山に灯ったあの数々の灯火が、煮え切れぬ私の戦いへの思いをぶち破り、『平和への龍灯』として、はっきりと輝いていた。

富士山を見て  
地球を知る



## 『富士山を見て地球を知る』

たわわに実った柿と、初冠雪をいただいた夕焼けの富士山の美しい写真のかたわらに

『大富士をキャンパスとして柿実る』

と一句捻ってアルバムに書きながら、私の心は四半世紀前に溯っていた。

私の末娘が未だ中学校時代のことである。ある日突然学校の帰りに生まれたばかりの子犬を五匹、登校途中のお宮の境内から拾って来たのである。まだ目も見えない赤ら顔を左右に振って乳を欲しがっている子犬達である。静かだった我が家はその一瞬で大騒ぎになった。牛乳を買って来て一匹づつスポイトで飲ませたり、空き箱にボロを引き、上に莫座を乗せた俄作りの犬小屋の製作である。拾って来た本人はもとより、俄に我が家に赤子が五人増えた有り様であるから大変である。

我が家では幸い？双子は生まれなかった。五っ子の子供さんを授かったご家庭の驚きと喜びはさぞかしであつたろうと、犬等と比べる不謹慎な思いが、一瞬私の脳裏をかすめて行った。娘を除いて我が家の皆はぶつぶつ言いながらも皆で牛

乳をやり、小屋から出して遊ばせてやったりしていた。子犬共はすくすくと成長して行ったが、狭い我が家の庭ではとても五匹の犬は飼えないので、今度は婿入り、嫁入り捜しの場面とわかる。

その頃我が家の子供達は上は未だ高校生なので、貰ってもらう苦勞は知らないのでのんきに構えているが、犬一匹でも貰って貰い、家族に加えてもらう事は大変なことである。娘は拾って来た責任を感じてか、貰って貰えそうな学校の友達四、五人づつを我が家に引っ張りこんで、早速お見合い騒ぎである。犬を責任もって生涯飼うということは、誰でもそうたやすくは出来ない訳である。

それでも私共々狭心症では死にそうもない我が家の奥方も手伝って、（私も一匹会社の同僚に泣きついて貰って貰った。）何とか四匹かたずける事ができほつとした事であった。雌の一匹が我が家の箱入り娘の顔をして残り、我が家の騒動は一応形がついた事ではあるが、その一匹の散歩のお守り役は何時の間にか私の役になっていた。（我が家の子供達は、勉強が忙しい！と言う大義名分が通っていた。）でも、晴れた日に犬を連れて、我が家の近くにある海岸の堤防を三十分位歩きながら、富士山を眺めたのもよい思い出であった。と過去系で書くのは、その犬も十五年位して死んでしまったのである。可愛いがっていたものの死に

目に会うのは嫌なものである。と言ひ訳を勝手に作りながら、その後犬共は我が家の一員には成っていない。

犬と富士山そして地球、ほとんど取り合わせのない関係である。小さな拾い犬と、高く聳える日本一の富士山、さらに広大な宇宙に存在する地球である。でもその三者の關係が私には忘れられない事として蘇えってきたのである。そしてあの犬と散歩していたからこそ氣がついた事があった。

夕陽を浴びた富士、私の一番好きな富士の姿である。陽が西の山に沈んでも、富士山には未だ夕陽が残っている。そして初冠雪に映える夕陽を惜しみ無く押し上げる様に、陰が段々と富士山を登って行く雄大さ。あの犬とゆっくりと散歩し、氣高くそびえる富士山を右に見、伊豆の山々をバックに大きく広がった駿河灣を左に見て、心地よい浜風を身に受けて歩くと、心の余裕が与えられたのか、今まで氣が付かぬ富士の変化にしばし見とれる一時であった。

地平線に陽が落ち、そして富士山を陰が段々と登っていく。地球が回っているから時差となつて、陰が頂上目指して登って行くのである。そしてニュートンがリングの落ちるのを見て地球の引力を発見した様に、私も犬と散歩していたあの時あの頃、地球が丸いのだと言うことを身をもって感じた時であった。そして

富士山に登る陰の時差を利用して丸い地球の直径を計算出来ないかと、密かに思い巡らせていたのである。正にあの犬が居た御陰である。

犬の散歩を通じて、また神様が私に知恵を一つ授けてくださったのである。でもそれから十年あまり、私は忙しきにかまけてその事は忘れかけていた。

昨秋柿が赤く実り、茶畑の向こうに白く薄化粧をした富士山を写真に撮る機会があった。私の一番好きな風景であり、ねらっていたチャンスでもあった。出来上がった写真を手にしアルバムに張って、改めて富士山を思い出し、愛犬『友』を思い出したのである。

そして又あの時の富士山を昇る蔭を思い出したのである。早速富士山を昇る蔭の時間と地球の直径との関係式を建てて見た。三角函数を習った学生なら誰でも出来る式で、大凡の直径が計算出来るのである。宇宙に人口衛星が回り、宇宙から見た丸い地球の姿がテレビの画面をにぎわす今日であり、詳細に地球の直径等計算されている事と思うが、自分の眼で、自分の身の回りのもので、そして自分の考えた方法で、地球の大きさを測る、この大地に生を受けた人間としての、私のロマンをかき立てるものでもあり、愛犬『友』と心の中で誓った事でもある。

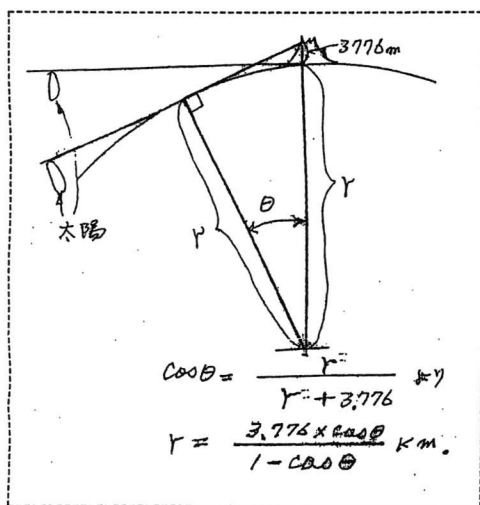
愛犬『友』と散歩していたとき、太陽が西の山に沈み富士山の頂上に陰が昇り



詰めるまで、約七分弱の時間が掛かっていた。山では無く海の水平線に太陽が沈み、頂上までの時間が計りたかったのであるが、田子の浦砂丘の堤防上ではそれは適えぬ事であった。

さて簡便計算式を公開すると、地球は一日で一回り三六〇度するのである。そしてその時間は六〇分×二四時間で一四四〇分となる。だから一分当たり地球の回る角度は $360^\circ \div 1440$ 分であり、一分当たり地球は $0.25^\circ$ 回るのである。(こんな単純な地球の動きさえも、計算して見て初めて私は気づいたのである。) 海に太陽が沈み頂上まで蔭が昇るのに八分かかるとすると、地球は角度で二度回る事になる。

次ぎの頁の図は、円形の地球の上に富士山がそびえて居る図面である。地平線に太陽が沈み、そして富士山の頂上に蔭が達した時の図解であるが、直角三角形の辺と角度の関係となり、地球の半径が底辺となり、地球の半径に富士山の高さである三七七六米をプラスしたものが、斜辺の長さとなるのである。そして地球の半径の記号を  $r$  として式を立てると次頁の様になる。



かけた私の心を、計算し改めて眺めた時に、愛犬『友』の生きていた十年前のあの時に蘇らせてくれていた。

四季折々に化粧を変え、雲という着物をまとい、朝に夕に、千変万化の美しさをもって我々の前に現れている富士山、左右の稜線のなだらかに描く曲線などを

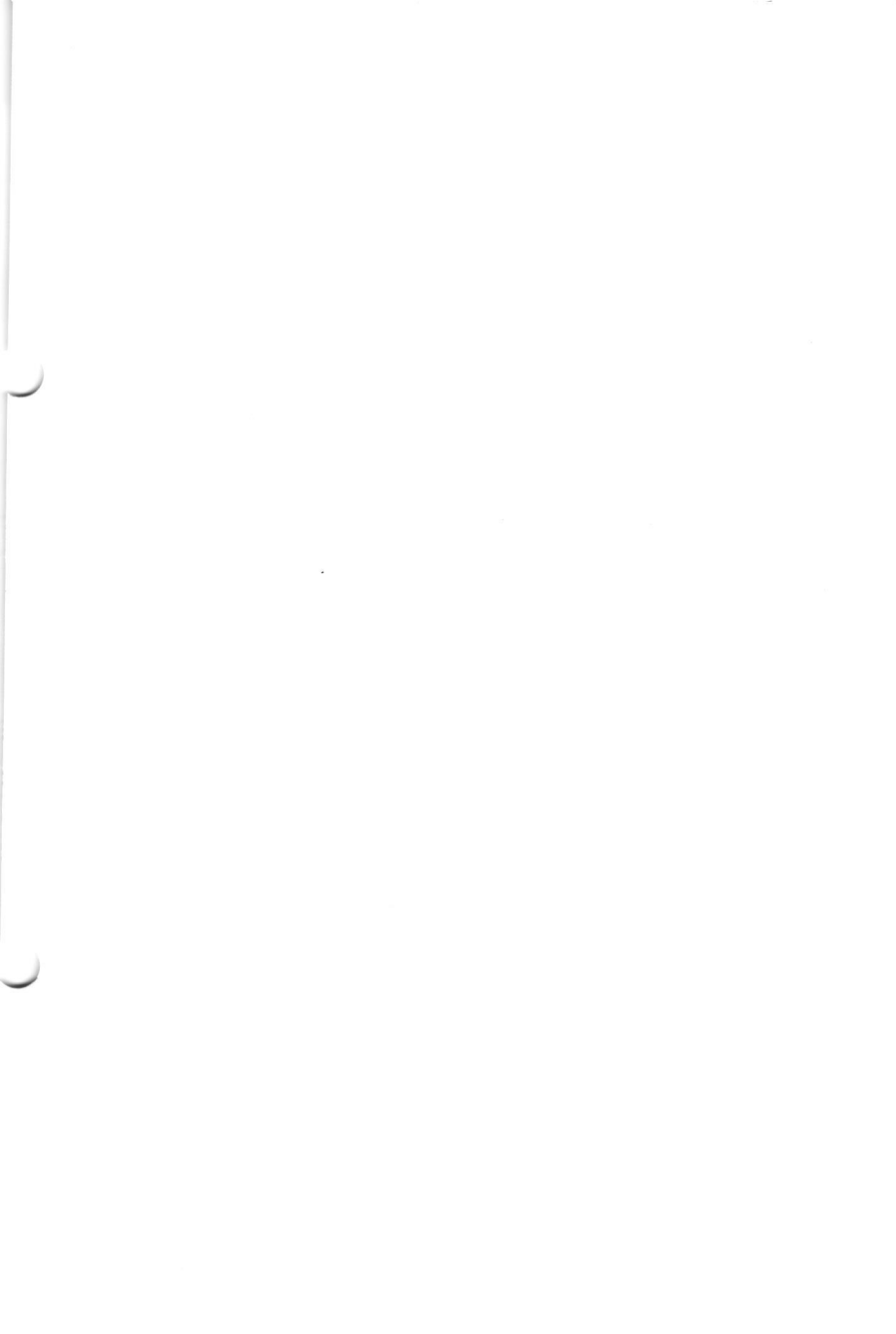
頂上まで蔭が達する時間を八分として計算すると、地球の直径は一二、三八九キロメートルとなる。でもこれは太陽が富士山の真上を通ったとしての計算であり、実際は太陽はもっと南の赤道に近い所を通るので誤差があるわけである。でも何となく自分で知り得た地球の直径の算出に、素人の私としては大いに満足する思いである。

富士山の真南に移り住み、晴れた富士山を五十余年眺めて来た。富士山と言うものを、呼吸する空気のように無関心になり

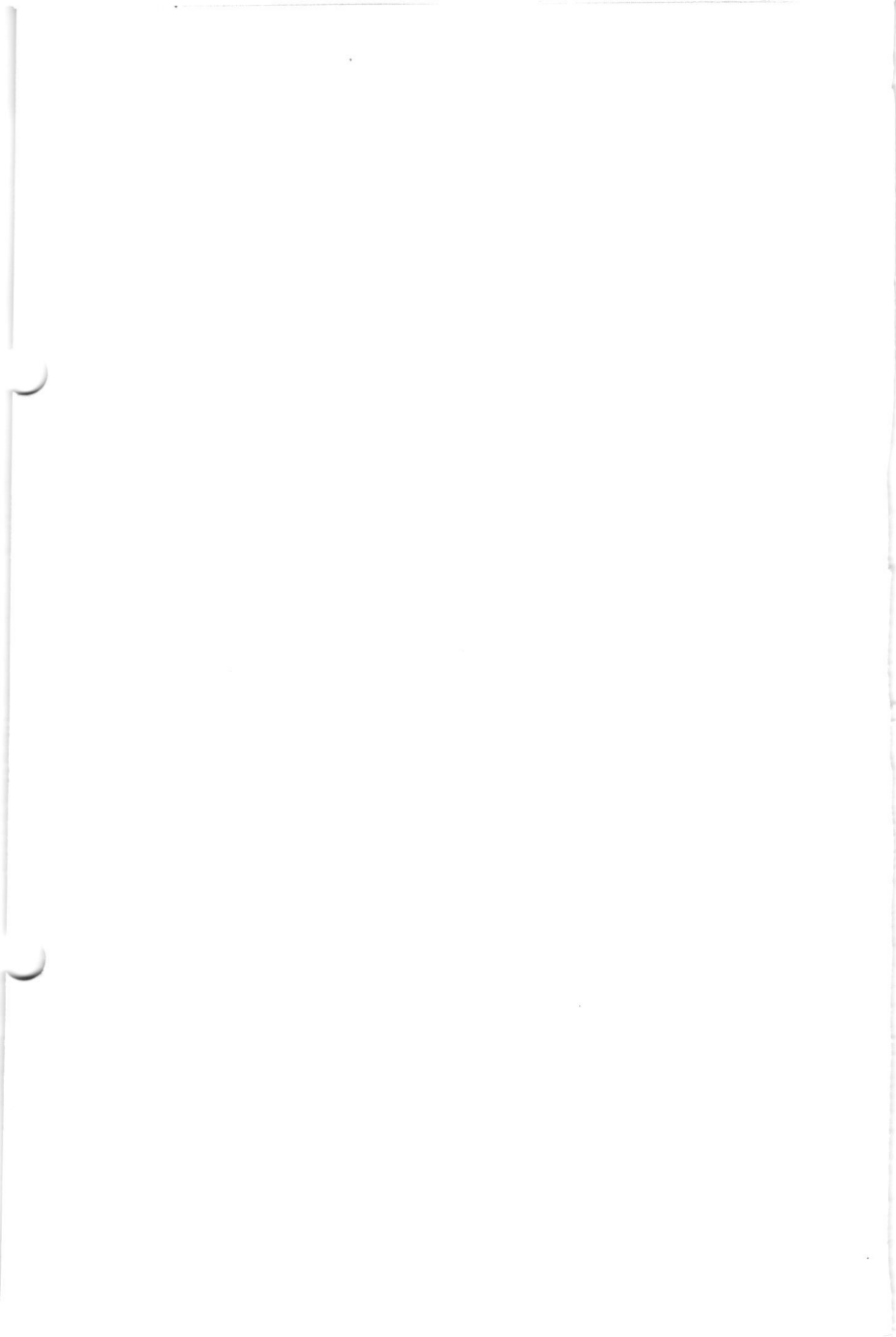
含め、私には江戸時代の浮世絵師、葛飾北斎の描く『赤富士』より優しい女性美を感じさせるものである。忙しさのあまり当時多少持て余し気味に思っていた犬と触れ会った事によって、広大な宇宙に浮かぶ地球まで考えを及ぼす事ができ、小事にこだわる自分の醜い心と、此の大地の偉大さと美しさ、自然の織り成すカラクリを見逃す事なく、もっと大きく広い目で見直し、私の心の糧とした心境になって来た。その心の変化は、十年前に天国に行ってしまった愛犬『友』が私の為に、特別に警告を与えてくれている事なのかも知れない。

神様は私に無駄なものはお与えにならなかった。

『第七回富士ニース、エッセイコンクトル入選作品』



支え支えられろ



『支え、支えられる。』

会社の北の窓を開けると、大空にくっきりと富士山が聳え、その下に新しく芽を出した緑豊かな茶畑の向こうに、十五本程の柿の木が見えてくる。

青い葉の間から、色づき始めた柿の実が顔を出し始めている。

小さい時都会に育った私にとって、大好きな風景の一つであり、そして百寿を迎えた母に取っても、大好物な柿の実である。

母は明治三十一年十月一日生まれ、歴史書によればその年にキューリー夫妻がラジウムを発見している。電灯がつき、近代社会が発達しかけた年であり、二十世紀の始まりに三年前の年であった。そして六年後、日露戦争が勃発している。第一次世界大戦が大正七年に終わると、大正十二年の関東大震災に、京都から東京に出て来ていた母は、巡り会っていた様だ。昭和初期の世界的大恐慌。そして昭和六年に始まった満州事変から、第二次世界大戦、敗戦へと続いている。東京で二度も戦災し家を失い、命からがら私を頼って静岡に来た母、終戦後のあの藁パンをも食べた食糧難の時代に夫を失い、私共四人の兄弟を育ててくれた母、激動期の百年を、よく子を、孫を守り、支えてくれたものだ。

：  
支え 支えられる、私の好きな言葉だ。：

母が私共を支えてくれた影には、多くの方々のお支えがあつての事であり、それは『愛』と呼ばれるものだと思う。現に最近食欲のなくなった母に対し、栄養豊富な自家製ドロップを作り続けて戴いている友達、お年を召しておられるのに、よく母を見舞つて下さる方々、感謝の涙の出る思いである。

十九世紀に生まれた母、百歳に満足せず、もう五十六年は生きて二十一世紀を迎えて欲しい。二十世紀を完全に生きた者として、私達の誇れる者となって欲しい。それまでは私も頑張れると思うから！

∴ 以下私達の思いを、感謝をもって綴りました。 ∴

此処二三年母に対する思いを、何となく作っておりました。母に対する自分自身の気持ちをも、整理するつもりもありました。

読み返すと、まことに拙い文章ですが、母に対する百寿の祝いの心として、日頃お世話になっている方々への、感謝の印しの一端として、私達の思いが通ずればと、心密かに願っております。

詩、文は進、俳句は愛子の作ったものを集めました。

平成十年十月一日



『あんたは 幸せだよ。』

時計は早や、午後五時を過ぎていた。

打ち合わせのすんだ、会社での会話である。

「さて、おばあちゃんが待っているから、帰るとするか。」

「おばあちゃんて、誰のこと？」

「そりゃあ、うちのかみさんの事さ。」

「私には、お袋も待っているんだよ。」

「え！ おかあさんがいるの おいくつ？」

「この十月で、満九十八才になる。」

「へえ！ あんたは 幸せだよ。」

素朴で、飾らない言葉が、山口製作所の社長の口からほとぼしり出た。

普通ならば、寝たきりなのか？ とか、ぼけていないのか？ とかの問い掛けの言葉が出るものである。

それら一切お構いなしに「あんたは 幸せだよ。」の一言の言葉が、私の耳に飛び込んで来た。

その、無条件の言葉が、一瞬私の胸を射たのである。

推測の域を出ないが、「あんたは」の言葉の裏に、私よりは若い社長であるが、ご両親は、おられ無いのかも知れない。

ご両親への追慕の思いが、一言となって現れたのかも知れない。

親がどんな条件の元でも、生きていと言う事が、どんなに幸せな事かと、強く教えられた思いである。

大正生まれの私は、会社では最高年齢の者となってしまうた。

それでも母が居る、確かに幸せ者かも知れない。

家族が居る。健康が与えられている。親しい友が居る。曲がりなりにも仕事をこなして行ける。この日常の平凡な、あたりまえの様な、空気の様な存在を改めて再認識させられた一言であった。

チルチル ミチル ではないが、幸せとは、平凡な事なのかも知れない。

私達のすぐ身の回りに存在しているものかも知れない。

背伸びをしないでも、きつと手の届ける所に、神様が備えてくれているものの様な気がして来た。

背伸びをして、足元に転がっている幸せを、踏みにじって居るのも知らずに！

「あんたは 幸せだよ」と呼び掛けられているのは、私一人に呼び掛けられているのではなく、総ての人に呼び掛けられているのだと思う。

幸せの定義を、ある価値感だけに縛られて、私達は追い求めているのではないだろうか？

もっと大きな目で、もっと大きな心で、もっと豊かな感性で、私達の回りを見直して見たい。 現代版 チルチル ミチル になり変わって。

「親思う 心に勝る親心

今日のおとずれ 何と聞くらん。」

と幕末の刺士が、捕えられ、打首になる時の辞世の句と覚えているが、国を思い、死を渡した阿修羅の戦いの最後に、親を思う気持ちと率直に表している事は、一人の人間の姿として、尊いものを私に教えてくれている。

私を取り巻く、空気のような存在の中に、私にとって何物にも変えがたい、宝物のあるのだと……！

「あんたは 幸せだよ。」の一言は、私の眠れる心を揺り起こしてくれた。

年と共に感性が鈍くなり、白内障になりかかった心の眼の鱗を、一枚落としてく  
れていた。

明日も、私を取り巻く恵まれた空気に感謝しながら、富士山の様な大きな心で、  
そして野に咲く可憐な花の様に、ひっそりと、でも逞しく、感性豊かに生きて行  
きたい。多くの人々と共に、平和な白い小鳩を見詰めながら！

一九九六年九月二五日

## 落ち葉踏む

童女のごとき 母を見ゆ

『白寿を迎える母に捧げる詩。』

『自動車に気をつけて』

『早く帰って来てね』

私が、『会社に行って来ます。』

と言うと、何時も同じ様に帰って来る、毎朝の母の言葉である。

単純な毎朝繰り返すこの同じ言葉を、私も車を運転しながら心の中で唱えている。

『自動車に気をつけて』

『早く帰って来てね』

私に対する母の最大の願いと、祈りとを、私は毎日聞き続けているのである。

そして私の幸せな一日が、そこから始まる。

白寿を迎え様としている、『母さん』！

私が五歳の時日赤病院で、脳膜炎手術の全身麻酔に、数を十まで読んだら解らなくなつてそして、覚めたら母さんがそばに居ましたね。今も確りと覚えています。また中学時代に足の関節結核で、ギブスの三年間の松葉杖生活の毎日。

そして保険など無い時代に、義足と同じ様な補助機に変わってくれたのは、私には未だに黙っているけれど、母さんのタンスの着物でしたね。

そして又腎臓結核での摘出手術で、東大の私のベットの下で寝泊まりの看病生活。退院間近になって、病院を二人で抜け出して、上野の忍ばずの池で行われていた盆踊りを見に行った時の、生きていた、ほっとした、幸せのあの喜び  
：

私は、兄弟で一番『母さん』に心配をかけた、親不孝者でした。

私がまだ小さかった頃、『母さん』は心臓が弱く貧血で青白く、二階まで階段が昇れないほど弱かったですね。

風呂の蒔き割りから、炊事、洗濯と、冬にはよく親指や人差し指にアカギレができて、その割れ目に、何か黒い薬を流し込んで、我慢していましたね。

本屋の店があつて、忙しい『母さん』だったけれど、東京霞町の八の日に出る鬼子母神の縁日に、よく『母さん』は私たちを連れて行ってくれましたね。

小さい私には、それが とても楽しみだった。：

戦前、戦中、戦後と食料も無かった時代に、弱かった『母さん』だったけれど、私達兄弟四人を育ててくれました。

そして今は十人のひ孫『大おばあちゃん』になりましたね。

父さんが亡くなって五十年余り、その間『母さん』の身内では一人の不幸も無く今日を迎えられた事、父さんの守りと、『母さん』の祈りがあったからだと思います。私もとくに古希を過ぎました。でも毎日『行ってきます』と『母さん』に言えること、そして好きな仕事の出来る事を、心から幸せに思っています。

どうか『母さん』一回でも多く、一日でも長く、私の『行って来ます』に対して『自動車に気を付けて』

『早く帰って来てね』

と、言い続けてくれる事を  
：

白寿を迎える『母さん』に対して、私の最大の願いであり、祈りであるのです。

一九九七年七月十二日



『手のひら』

小さくなった 手のひら

痩せ細ったゆび

布団から僅かに はみ出している 手のひら

突然 『危ないよ そっちに行くのじゃないよ。』

誰もいない部屋なのに 母が突然大きな叫び声を上げる。

私が急いでそのやせ細った小さな手のひらを握っても

母の叫びは収まらない

周期的に襲って来る 幻覚の症状

母の指は微かに痙攣の様に動いている。

両手でその手を握っても 微かな痙攣は止まらない。

耳元で『誰もいないよ 静かに寝るのだよ』と言っても  
母は黙っている。

二ヶ月余りで百歳を迎える 母。

暴れん坊の幼い私を 叱り付けているかもしれない。

私を抱き 何度乳房を与えてくれた事か ……この小さな手。洗い板  
の上で 下着をゴシゴシ洗ってくれた手はもっと『ごつ』かった。  
アカギレの割れ目を 黒い薬で埋めて 洗ってくれて いたっけ。  
小さな手のひらを ちよつと強く握ると細い指も微かに強く握って  
来る 母と私の 手のひらの絆である。

明治に生まれ 大正 昭和 平成と生きて来た 母  
激動期をしつかりと押さえて来たこの小さな 手のひら

すやすやと眠りに着いた 母の小さな手をそっと布団の中に収めた。

母の日や

老いても母の 京ことば

フリージャー

陽の香を束に 母の居間

花の中

手押し車の 母の試歩

ねんごろに

母の爪切る  
梅雨晴れ間

母病みて

紫陽花色を  
深めけり

背のびして

柿吊るす母  
卒寿越ゆ

春の歌

口ずさむ母 白寿なり

飯櫃の

母の香りや 零余子飯

菊酒を

含み 百寿の母笑ふ

百寿越す

小さき 母の背洗い終え

明日の健やか神にぞ  
祈る

砂の上の家





## 『砂の上の家』

砂山の砂に腹這い

初恋の

いたみを遠くおもひ出づる日

ロマンチスト石川啄木の『一握の砂』の詩を読む度に、私は何となく砂に対する愛着を禁じ得ないのである。終戦後吉原駅の南にある高台通称砂山を訪れたのは、昭和二十一年夏であった。吉原駅の南の田圃を横切って砂山に通ずる田圃道を歩み砂山に登ると、道路らしいものは一つもなく、隣との境等は全く見当たらず、ぼつん、ぼつんと離れて建つ家は、嵐の時には飛ばされそうな家であった。

南に面した濡れ縁の柱の土台石は、砂の中に半ばうずくまって、濡れ縁はきしみかけていた。遮る木々も少なく砂の強い照り返しと、堤防もなく海から吹き付ける強い風に耐えている家であった。

白い砂丘の上に立つ家、足首の潜りかけた砂を握ると、乾いた砂は文字通りさらさらと指の間をぐぐり抜けて、また足首にこぼれ落ちる砂、五十有余年経った今も、あの風景、あの乾いた砂の肌触りが、まざまざと蘇って来る。

いのちなき砂のかなしさよ

さらさらと

握れば指のあいだより落つ

啄木は砂に語り、言葉とは逆に砂に命を見いだしているのだと思う。

プール等では味わい得ないあの砂の感触、風になびいてさらさらと落ちて行く砂の囁き、太古からの歴史を知っている砂達にじっと耳を傾けて見たくなった。

あの頃思いもしなかった砂山の地に、縁有って住み着き早四十年の月日が経っていた。道路が舗装され、隣との間にブロック塀が回され、表面は土に覆われて握り取る砂もない。一面の住宅街となった砂山である。あの時語ってくれた砂は沈黙して家の下に潜っている。私には懐かしい砂たちである。

日本の古くからの「ことわざ」に【砂上の楼閣】という言葉がある。

（砂の上に建てた高い建物は、基礎が不安定ですぐ倒れてしまう所から）あやふやで、実現しそうな事のない事のとえ。と辞書には記してあった。

又聖書のマタイ七章の二十六節には、有名な言葉として、「わたしのこれらの言

葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。」と記されている。

通称砂山に家を建てた私の家は、正に【砂の上の家】である。別に聖書に逆らう大それた気持ち等少しもなく、古い「ことわざ」を知らなかった訳でもない。それらの言葉は例えとして、ニュアンスとして、受け止めている。

私も頑丈な岩の上に建てた家の方が頑丈だとは思っている。

でも五十年前に見たあの砂山の風景が、私の心の片隅に生き続けて居たからかも知れない。砂山の地に家を建てることに、私は何らの抵抗はなかった。

沈黙して居る砂が、私を呼び寄せてくれていると想いたいのである。

砂上の楼閣、何だか長年お世話になっているこの土地について、土地の生い立ちや、地質、歴史等を調べたくなり、図書館で書物を漁ってみた。

整理されている図書館で、求め探せば有るもので、以下の様に調べる事が出来た。まずこの砂丘であるが、富士川の河口から、沼津市の河口に至るまでの海岸砂丘群が続いており、まず呼び名であるが、東から千本砂丘、浮き島砂丘、東田子の浦砂丘、西田子の浦砂丘、と四つの砂丘に分けられ、総称田子の浦砂丘と言っている様である。（私は全然知らなかった。）そしてその規模は、全長二十三Km

幅は二百m～五百m、標高は高い所で二十・三mであり、（我家の近くの様である）平均五～十mとなっている。

砂丘の出来る生い立ちの歴史を見ると、数万年前の古富士山が盛んに活躍していた頃から、西の富士川や東の狩野川が運んできた土砂によって海岸から少し離れた所に、天の橋立の様な砂州として出来た様で、その後約五千年前に気候の温暖化により一旦海底に沈み、気候が寒くなるにつれ海底から顔を出した様である。この砂州が自然の堤防になり、内側にラグーン（潟湖）が出来て、これが浮島ヶ原の元になった、浮き島沼である様である。

（私はハワイの海岸や、沖縄の海岸に見られる、岸から百m位離れて一直線に出来ている、サンゴで出来たリーフと呼ぶ浅瀬の様なもの、基礎になって出来るのかと思います、我家の下には、サンゴが存在するのだと夢見ていたが、それははかない夢であった。）

日本三景の天の橋立と同じ様な誕生の歴史をもつこの砂丘は、日本一の富士山を北に据え、万葉集の山部赤人が『田子の浦打ち出て見れば……』と読んだ様に、富士山を眺めるに最も良い場所となったのである。海まで五分、JR吉原駅まで

八〇九分の位置に我家は砂上の楼閣として建っている。

さて問題は、地下の構造である。七〇八年前に建築用資材として砂が不足して、業者が近くの公園を堀り、砂を採取しているのを見たが、十m位掘っても奇麗な砂が出て来て、岩らしいものは、ひとかけらも見付からなかった。

文献により我家のすぐそばに有る元吉原中学校の土地のボーリング調査の記録を見ると、地上より四十m位まで細粒砂層でその下十五m位が粘土質細砂であり、またその下が二十m位細粒砂層となり、それ等を繰り返している。火山レキ玉石までは百m位掘らないと達しない様である。海中に沈んだり、水面上に顔を出したり砂丘の歴史が良く伺える地層となっている。

一方少し北の方にある、砂山より十八m位低く、浮き島と同レベルの高さの土地であるJR吉原駅の地層は、二〇三mの埋積土があるだけで地下百m位まで、奇麗に一樣な海成砂レキ層と成っており、我家のある砂丘とは明らかに地層分布に隔たりがあり、生い立ちの歴史に差がある事を示していた。

日本三景の天の橋立と構造は似ていても、長さ三Kmの天の橋立に対し、七倍もある田子の浦砂丘、三十数年住みながら、初めて知る我家の存在する土地を改めて調べて見て、自然の営みの偉大さと言うか、自分の知らざる事の多きと言うか、我家の砂上の楼閣を嘆く前に、自分自身の知識が砂上の楼閣になっている様

に覚えてきた。

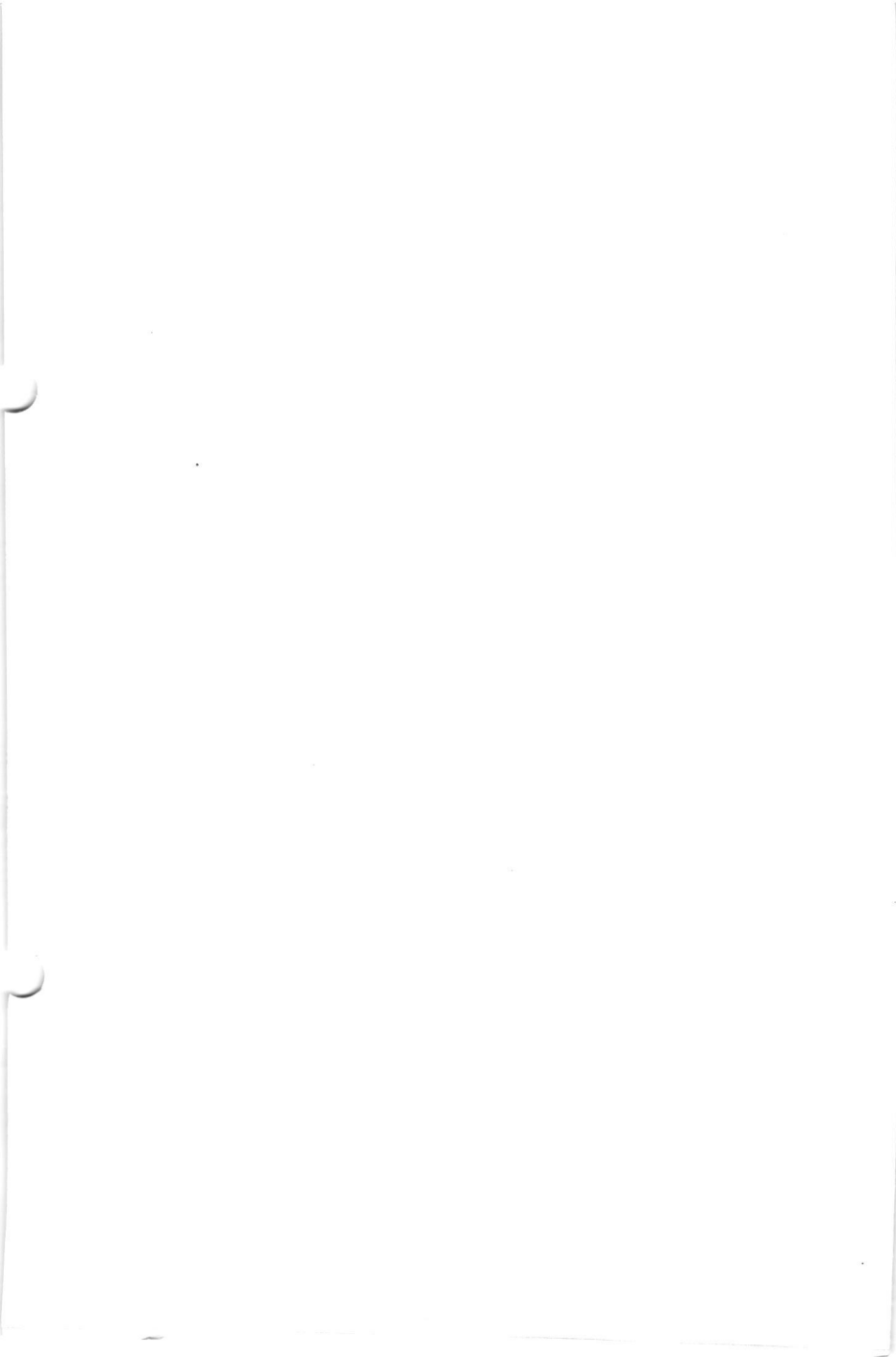
地球温暖化が進んでいる。このまま進むと再び根方街道が波に洗われ、膨大な田子の橋立が出来るかも知れない。でも京都のチンパージンの太郎もお金で物を買う知恵をもっている。私の孫の孫たちも、きつとそれを防ぐ手段を考え着くに違いない。子供たちはそれぞれ別の地で懸命に人生を送っている。私が余り取り越し苦労を考える事も無いのかも知れない。そして私の家は【砂上の楼閣】とは言えない、小さな2階屋に住んでいるのだから……！

砂山にも緑の樹木がすくすくと育ち、今日も鳥が囀えつつっている。私は子供達を育て、根を生やしたこの【砂の上の家】を、今後共こよなく愛して行きたい気持ちに狩られてきた。

……大地知る 偉大な日々や 五月晴れ……

『第8回富士ニース、エッセイコンクール入選作品』

草花に学ぶ





## 『草花に学ぶ』

直径三十cm程のあかしやの木、それは猫の額ほどのわが家の庭に、鎮座ましましている唯一の太木である。その他にはミカンの木、ツバキ、ツツジが少々毎年その時々美しい花を咲かせ、あるいは実をならせている。

その他に壹年草の小さな花が、それぞれ寄り添う様に所狭しと咲いている。

可憐な花たちである。それぞれが自分の最大の美しさを発揮し、風に素直に揺れ、でも折れず立ち直って咲き続けるたくましさ、あの細い茎の中に秘めた意志の強さの様なものを、感ぜずにはいられない。

花の美しさ、それは古今東西を問わず人の心を潤し、慰め続けている貴重なものである。人はそれを花ことばに変え、その言葉が多く見られる様に、はかない美しさやら、純情なみずみずしさを表し、そして『やはり 野に置け れんげ草』と言われる様に、時には一つ一つは弱いれんげの花達ではあっても、畑一杯の可憐な花の群が、私の疎くなり、頑固になった心を自然に導いてくれている。

『歳々年々花相似たり、歳々年々人同じからず』と、国木田独歩の武蔵野の一節

にある様に、自然と人、花と人、そしてその運命を良く現した表現であり、また考えさせられる響きをもった言葉であると思つてゐる。

あの可憐な花が、秋になりそして冬になると枯れて無くなつてしまふが、また春になると芽を出し美しい花を咲かせ、我々を慰めてくれている。

それは枯れた面影を忘れさせる姿であり、連続した永遠の命を思わせるものである。そして良く考えてみると、あの一步も動け無い植物が、自分たちとは全然異なつた蝶や蜂などの動物を使って、あの可憐な花を通じて受精して種を作つて撒き、また胞子を風で飛ばして、子孫をあちこちに増やす賢明な努力を重ねているのである。頭の中ではこれらの事は、何となく知つていても、改めて自然の営みを静かに思う時に、驚きの目を開かれるものである。

人も枯れる時があるのである。あのか弱き花の何十倍の命があつたとしても、死は訪れるものである。人において永遠の命とは何なのであるか？ 姿形のみを子孫に残すだけでは、永遠の命と言うにはお粗末なものの様に思える。人における残したい花卉とは、一体何なのであるか？ 神様が私たちに与えてくださった唯一の花卉とは、真実な愛の心であらう。

でも人の心、それは花の様に美しい心もあれば、花に無い醜い心も同居してしまっている。アダムとエバからの宿命なのであるのか？ もとより私たちは、心を磨き美しい心を子供達に、孫たちに残して行きたい。それが私たちに与えられた、永遠の命であり唯一の財産であらうと思うからである。

あの可憐な花も命の引き継ぎの為に、驚く程の巧みな技を生み出している。動物を誘い、そしてそれを巧みに使って美しい花を残しているのである。

人はその心を残すのに、花の様な努力をしているのであるのか、最善の工夫をしているのであるのか？ 考えさせられる一事ではある。

人は花の匂いの様に、美しい歌声を持ち聞く耳も持つている。美しい花卉の色の様に、巧みな言葉も備えられている。また永遠に残せる字も文章も備えられている。草花が枯れる様に、人の肉体は滅びて行くのである。でも、心は残せるものである。我々はもつと花の努力の様に、花の工夫の様に、神から与えられそして親から引き継いだ心をより美しくして、文字で残して行きたいものである。それが子孫に残せる、滅びぬ唯一の財産である様な気がして来た。あの踏めば潰れてしまう野辺の花から、学ぶ事の多いことを悟らせてもらった一日ではあった。

わが家の唯一の大木、あかしやの木も一雨毎に若葉をぐんぐん成長させている。あの木からも、私に対する様々なメッセージが送られている事であろう。

それが聞ける様に、私のアンテナも少し時間を作って錆びを落とし、磨いておかねばなるまい。

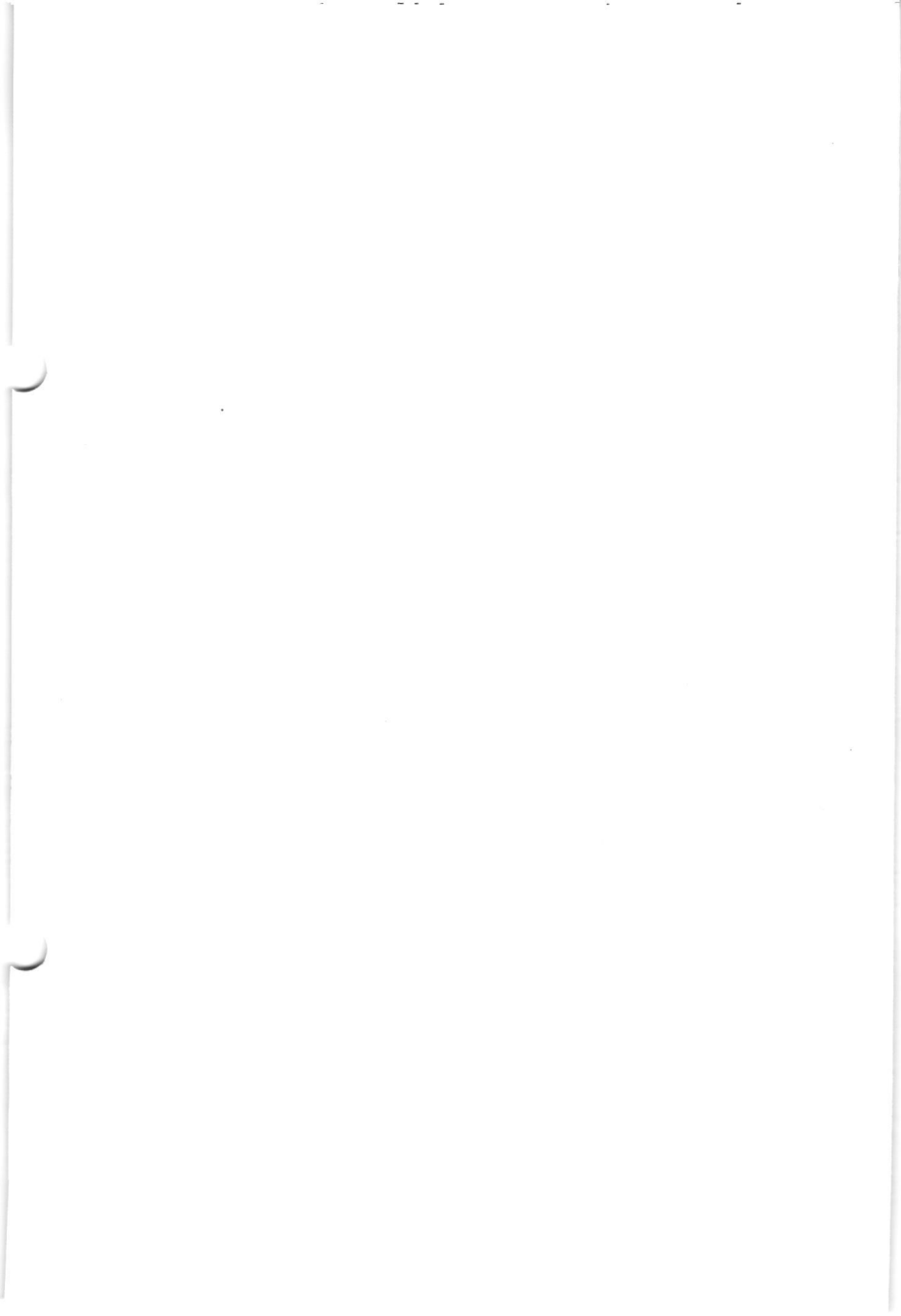
もう少し、生かしてもらっているのだから！

朝まだ小雨の残る、肌寒い休日の午前であつた。

一九九九年四月二十四日

時の流れに

身をまかせ



## 随筆

### 『時の流れに身をまかせ』

最近売れ出し始めた電波時計、その広告に三十万年に一秒の狂いもないと書いてあった。三十万年、気が遠くなる様な年月である。

三千世紀に生きる子孫が巡り会う年である。原子の周波数を元にした標準時間からの電波で調整されるのであるから、狂いはないのであろうが、すごい精度で長期保証ではある。

でもわが家には未だ電波時計は存在しない。だから時々テレビの時報と時計を見比べながら時を過ごしている。私には見比べる時が有る方が何となく楽しく、親しみやすい気分である。そして忘れかけた時を思い出している。戦中戦後から、平和憲法下の復興期までの『時の流れ』を独り噛み締めながら、過ぎ越し、来る時を、思い巡らしているのである。

栄枯盛衰時の流れと、源平の戦いも去ることながら、大日本帝国も文字通り昭

和二十年に敗戦を迎え、軍国主義、現人神の時代から、民主主義の時代が変わったのである。

日の丸の旗を襷にかけ、全校生徒の前で予科練に志願して行った友達が、中学生の私には憧れの的であった。それは日本人として当たり前の気持ちでいたし、何の疑問ももたぬ自分であった。およそ『時の流れ』等考え、意識して来た人間ではなかったのである。

また大きな衝撃事件として、私がまだ小学生の頃、家の近くに起こった事件であり、たむろしていた反乱兵士の鎮圧の為に、軽飛行機から撒かれた《兵に告ぐ》のビラ散布を、目の前に見た「二、二六事件」への遭遇……

「今からでも遅くない……」との書き出しの、原隊復帰を促す文面が今でも私の心の底に鮮明に焼き付いている。この事件で暗殺にあった者や、銃殺の処刑にあった者が大勢いたが、『時の流れ』を変え様とした、彼らの主義主張も明らかにされず、葬り去られた暗黒の時代であり、青春の私の『時の流れ』的一幕であった。そしてその後も敗戦で与えられた平和新憲法の下に慣れ過ぎて、心が眠っているのかもしれない。でも、そんな私でも最近憲法改正が叫ばれ出したり、有事防衛が叫ばれ出したりすると、戦争の悲惨さを体験して来ている者として、此処ら



でそろそろ眼を覚まして、このまま『身をまかせ』ていて良いのかと、多少氣になりだした所である。

七年程前に私は自分史らしきものを書いて、小さな自分の『時の流れ』を振り返って見ようと思った。その流れの中で、私が成長する節々の一つ一つに親の愛があり、そしてその傍らには、必ずと言って良いほど、家庭の、そして見ず知らずの人の愛が、私を生かしてくれていた。長い病気で死にたいと思っていた時に、他人のかけてくれた一言が私の眼を覚ましてくれていた。自分だけで生きているのでは無いと、回りを眺め共に生きる眼を、その『時』に与えてくれていた。三年間の闘病生活は、私の小さな心に本当の愛を教えてくれた、大切な『時の流れ』の一時であった。さて、戦後の物も食物も極端にない時代に、藁入りパンで空腹をしのぎ、資源のない日本が米代を払う外貨を稼ぐために懸命に働いた日々……。ここらで会社勤めも終わったら、「寝坊したい時には遠慮会釈なく寝るとか、自分の自由な時間を気ままに送るとするか」と心の中で密かに思っていた矢先『時の流れに身を任せ』等と、気ままにしているは居られない身近な重大ニースを仕入れてしまった。それは、最近研究されだした「体内時計」なるものの情報である。「体内時計」なる遺伝子を我々は先祖代々そのまま受け継ぎ、また伝

え様としている事である。お腹かが空いて来ると「腹時計が十二時だ」等と言っていたが、本当に動物は「体内時計」を授かっているらしい。そして、一日二十四時間の体のリズムを司どっている。朝の目覚め、昼の食欲、夜の睡眠等々毎日の生活リズムを、規則正しく保っていてくれるものであるらしい。でも、でもある。我々が受け継いだその「体内時計」は、どこでどう間違ったのか、一日が二十五時間なのである。地球のリズムと一時間の時差を生じてしまっている。もし我々が、『時の流れに身を任せ』とばかりに綴じ込められた部屋に吞気にしていると、逐次ずれていって、目覚めの朝の時がやがて暗闇の夜の時間になってしまうらしい。

「体内時計」なる現物は眼と耳を結んだ線上に左右一つずつ存在していて、米粒位の大きさらしい。動物の「体内時計」を取り出すと、夜昼リズムが付かない状態になると言う。

私たちは朝起きて、光りを充分浴びるとか、運動等の各種刺激を与えられる事によって、「体内時計」の時差を日々調整でき、そして時計を眺める事で更に微調整できるらしい。

定年を過ぎたからといって、朝寝坊して、朝食が昼に変わり、外えも出ずにの

ろのろしていると、一時間調整ができず、リズムが乱れる事になる。神様は日々『時の流れ』を疎かにしない様に、わざと地球の自転に対し一時間狂わしておられる様に思えてきた。

☆ 朝顔に つるべ取られて もらい水 ☆

千代女のさりげない俳句の中に秘めた、優しき自然への接し方、生理的な「体内時計」と共に、私の心の中に巣くう頑固な古時計も、彼女の様に自然の中に溶け込んだ心の時計として、調整したいと願う今日この頃である。

そして幸いにも私は最近『青い鳥』の作者メーテルリンクの書いた『花の知恵』なる本に、私の師匠である中央図書館で接することができた。さらに植物の生態学で多くの執筆をされている多田多恵子博士の、『植物の知恵』なる文献も読まして戴く機会があった。

植物は、動かない。神経も脳も持たない。声も立てない。地に縛りつけられている。まさに風まかせ、虫まかせの世界である。そして種の保存に欠かせない繁殖活動も動物である昆虫にまかせるしかない。正に植物は、『時の流れに身をまかせ』の受け身の典型的な存在であると思っていた。

ところがどっこい、それは私の浅はかな知識である事を悟らされた。読めば読

むほど植物たちの知恵の鮮やかさに、圧倒されるのである。確かに繁殖の受粉は昆虫にまかすのであるが、そのための工夫、また種を保存し運ぶ手段、今年と来年に別けて発芽する種子の工夫を持っている植物等々、私が感じていた『身をまかせ』所ではなく、あらゆる手段と、戦いをもって進化してきたのである。

そして植物と昆虫との共存共栄と言う、

《静と動》驚くべき哲学を作り、いまだに全世界で醜い殺し合いの続く人類社会を尻目に、栄えて来たのである。正に世界平和を理想とする国連の学ぶべき姿であり、手本である。

その一例として、最近の研究によると植物が虫に葉っぱを食べられる、所謂摂食行動等の害虫に襲われると、消化阻害物質を分泌しながら、隣に生えている植物に、植物ホルモンであるエチレンを大氣中に拡散して警戒信号を送り、危険が近付いている事を知らせるなど、自分自身の事だけでなく、助け合いの手段さえ備えられているらしい事が解明されて来た。(正に植物は会話する生物である。)

多田さんの書かれた文章を一部お借りすると、【縄文時代の遺跡から出土した種子が数千年の眠りから目覚めて芽を出した例もある。種子は、はるかな時空を旅するタイムカプセルでもあるのだ。 私たち人間を含めて、動物は「現在」の

時しか生きられない。だが植物は、種子と言う精巧なカプセルに生命情報を詰め込み、未来空間に送りだす事に成功した。植物はその『知恵』をもって、自らは動かないまま、時空を越えて生きる能力まで手に入れてしまったのだ』と結んでおられた。十九世紀中頃に「ダービンの進化論」が発表され、植物も数億年という時を費やして、進化して来たのかも知れない。でも子孫を残し、身を守る為のあの巧みな姿、『知恵』は、進化という一言だけで済まされる現象とは、私には到底思えぬすばらしい出来栄である。長い長い、時の流れの中に、この地球上で一番『知恵』が発達し、能力が有ると自負し自惚れている人間、もっと謙虚にもっと広い心で、共に生きるすべてのものに愛情をもって、見つめ、接して行きたいものと思った。

ここまで書いて来て私は、忘れてはならない人思い出した。大分以前の話であるが、東海道線に乗って居眠りをしていても、富士市を通過するときはその匂いで、起こされてしまうと言われたり、また小学生に海を書かせると薄茶色のヘド口の海を書いていた。

経済優先、産業優先の『時の流れ』であった。それに竿さす事の難しい時代であった。でも、幾多の圧迫やら誘惑を撥ね除けて、秀麗富士の輝く青空と、青い

海の町に戻してくれた、正に『時の流れに竿挿した』勇氣ある市民、故「申田寿彦」さんの、地域を愛し、そして尚人類愛に燃えて、一日の大半を水汲み時間に終始するタイ国スラムの婦人たち解放の為に、自ら井戸掘りに出掛けられた情熱と実行力を、忘れるわけには行かない。：

沈み行く夕陽の美しさ！森羅万象を美しく染め挙げ、夕陽から一直線に伸びた紅の海原、揺れ動くその柔らかさ、刻々と沈み行く太陽への追慕、留め様として留め得ない、大自然の営みである。正に悠久の大河である。

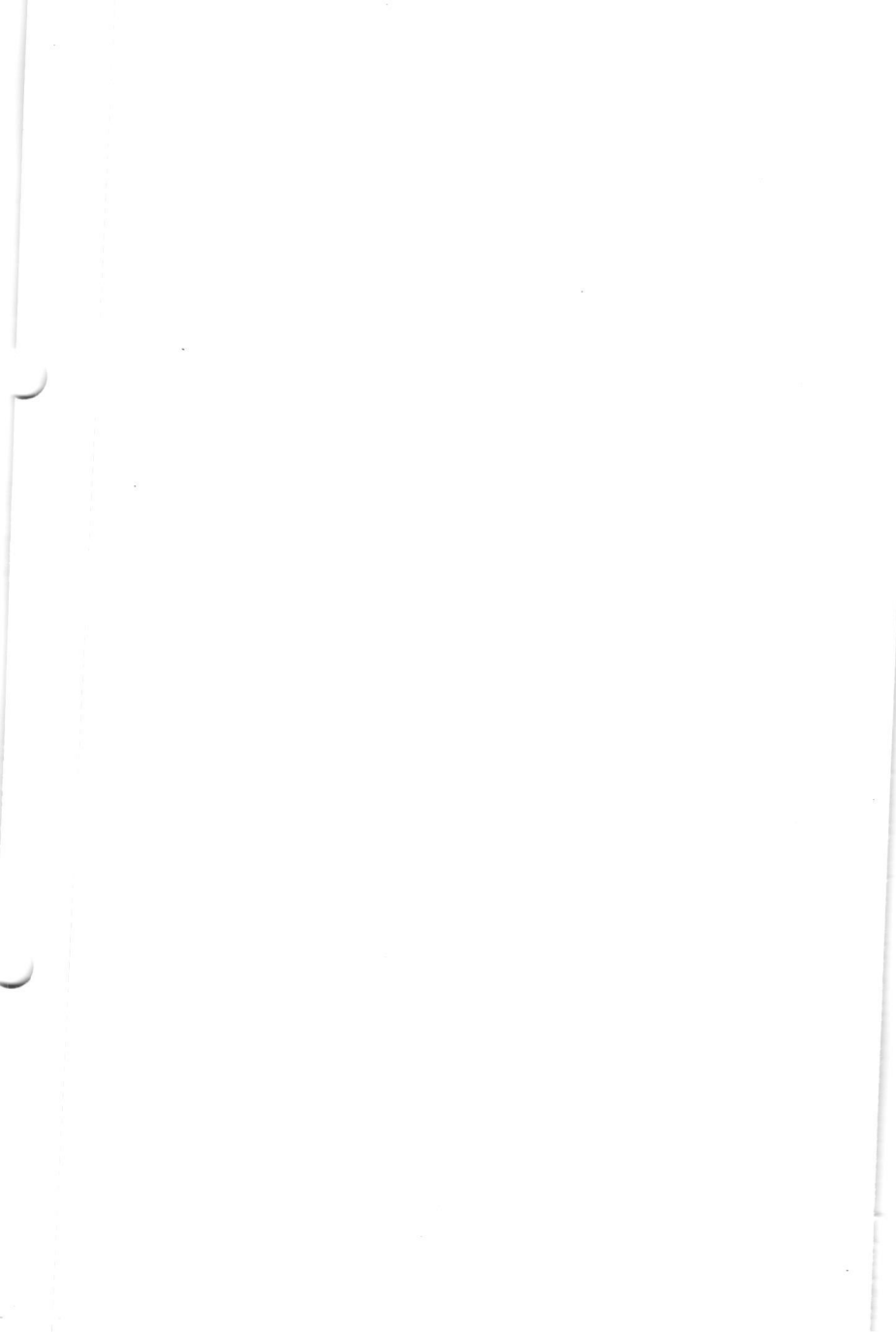
この偉大なる自然の前に、過ぎ去りし時を想い、私に与えられた『今の時』は如何と。刻々と過ぎ行く人生！。

大河に浮かんだ浮草の私は、如何なる姿、形なりやと？

【山は動かざれども、海は常に動けり。動かざるは眠りの如く、死の如し。しかし海は動けり。常に動けり。これ不断の覚醒なり。不朽の自由なり。】……と。

この石川啄木の明言を、動きの鈍った私の心の糧として、座右の銘として、明日も強く一歩一歩、歩み続けて行こう。

今日  
は人の身  
明日  
は我が身





# 『今日は他人の身、明日は我が身』

序に交えて。

回り行く地球、刻む時の流れ。誰にも止める事のできぬものである。

気が付けば、自分の年齢、過ぎ去った人生……振り返る瞬時のいとま。

明日と言う日を神に託して、私は生きて行こう。祈りのこの一時を！

二十一世紀を目の前にして、一段落と言うか、区切りと言うか、わたしの心の中に整理すべき物事が何となく、もやもやと霞みの様に漂い出している。

定年をとくに過ぎた元サラリーマンとして、また戦中戦後の荒波を肌で感じて来た者に取って、今日の日は、別世界の一夜が明けた朝の様に、昨日と異なる世界に足を踏み入れた感じがする現代である。

男が耳たぶに穴をあけ、イヤリングをつけ、茶髪にパーマをかけ闊歩している世界、……体に日の丸の旗を巻き付け、十五、六才の若さで予科練に自ら志願して、死地に飛び込んで行った、多くの友を知っている私にとって、現在はまさに別世界である。勿論外見のみで、人を律する思いは少しもないが。

国のため天皇陛下の為に、命を惜しまなかった世界、良い悪いは別にして、生

きる目的をはっきりともっていた世界から、あの敗戦後の生きる目的も掴めない、そして物質的にも、何も無い世界にほうり出された二十世紀後半、白い銀飯を腹一杯食べたかった、あの日あの頃、良くも今まで生きられたものであると思う。

あの経験を積んだ私の命、今となっては私は生きて、生きぬいて行きたい。

そして私と、いや私以上にあの時、あの頃、苦勞なさった方々と共に、命を大事にして生きて行きたい。我々は貴い経験をした命であるからと……！

この異なる世界に生きて、私より年上の方々は私以上に変化に追従するのは、大変な事であろうと思う。若い人と価値観が異なり、足腰も弱まり、そして何よりも、頭の老化が進むのは、生きながらえた者に取って大変な事である。

介護保険法がこの四月から実施され出した。有り難い事である。でもあの苦勞を乗り越えた者に取って、自らを律し自らを正して行きたい。少しでも社会に役立つ者として、世話になるより、生きて、生きて行きたい。我々自身の行き方を、我々自身が学びあって、朝眼が覚めた時に、昨日を後悔しない日々とする為に……。

…  
『生きて、生きて、明日を命ある日々にするために。』  
…

目次

|      |                    |
|------|--------------------|
| 第一話  | お風呂の栓を抜きなさい        |
| 第二話  | 方向音痴に付ける薬          |
| 第三話  | 同居異床の口と目は！         |
| 第四話  | あわて・蓋めき・痴呆症        |
| 第五話  | 天下分け目の、夏目と福沢       |
| 第六話  | 火の用心に、ご用心          |
| 第七話  | おっちょこ、ちよいの人と、しゃべる人 |
| 第八話  | ゆめゆめ高齢者を馬鹿にするなかれ   |
| 第九話  | 生きがい、走ってる          |
| 第十話  | これでは、合格点七十点ですが     |
| 第十一話 | 知って幸せ？ 知らぬで幸せ？     |

第十二話

空きの巢症候群

第十三話

他人か、はたまた夫婦か

第十四話

止めて、とまらぬエンドレス

第十五話

脳味噌の移り変わり

第十六話

ロング アンド ショート

第十七話

大事なお口の話

第十八話

光りを浴びよ。富士発

第十九話

世間体と言うやつ

第二十話

『アリガトウ』の一言を

第二十一話

支えられる

## 第一話 お風呂の栓を抜きなさい。

〈今日は〉

《はい ちよっと待っててえ》

一人暮らしのA姉、年の割りには元気な何時もの声が帰ってくる。洗い髪の後なのか、長い髪を手拭で擦りながら顔を出して来た。若ければ色っぽい姿であるが、ちよっとお年をとりすぎている。

《今死にそうになったのよお …》

〈えっ！ ほんと、… どしたの？〉

《今お風呂の掃除を仕掛けたのよ。風呂桶の底をタワシで洗おうとしたら、縁にかけていた手が滑って、頭ごと風呂の中に飛び込んでしまったの。残り湯が少しあったので顔ごと水の中 ……》

でも栓を抜いてあったので、浅くて水がすぐ引いてくれたの、それで助かったわ。感謝、感謝。》

実に笑えない話である。でも現実起こっている現象である。

A姉の声だけ聞くと、歳を感じさせない五十代前半の色っぽさを持った声である。

いくら若い気持ちでも年を取って手足の動きがにぶっているからである。  
身体的衰えは、歳と共に我々の上に必然的にのしかかって来る。



避けがたい現実である。

でも彼女はそれらを意識しているのか、して無いのか、朗らかに屈託なく話してくれるのである。

神様が与えられた天性の恵みなのか、それとも彼女自信がつかんだ、貴い自己改革がもたらせているのか？  
私の心の中に、ほっとした気持ちがよみがえって来た。

年を感じさせないA姉の屈託のない笑い声を、また明日も聞けるからである。彼女を通じて私はまた生きる力を与えられている。

私も風呂の掃除をしたら、栓を抜くという事にしよう。

## 第二話 方向音痴に付ける薬

〈もしもし、お爺さんどこえ行くんだい〉

《なに、わしかえ、わしゃ家に帰るんだよ。》

〈お爺さん！この道は海で行き止まりで、この先には家なんか無いよ〉

《なに！そりゃ困ったな。…》

『こちらは公報〇〇市のお知らせです。今朝午前八時頃〇〇町の八四才のAさんが、家を出たまま行方が分かりません。お心当たりの方は、最寄りの警察派出所にご連絡ください。Aさんの特徴は紺のズボンに黒っぽい上着を着て、白の野球帽を被っております。………』

市内全般に響く声が、スピーカーから流れてくる。

行く方不明のご家庭やご親戚は、さぞご心配の事と思うが、ご本人は当てもなく歩いている事が多いのである。

いわゆる『ボケ』の始まったお年寄りの一部に見られる方向音痴である。

第二次世界大戦の頃は、小学生から老人まで全国民が名前の入った胸掌を付けていたものであり、本人を確認するには良い方法と思うが、名前を付ける事は案外、

年寄りのプライドを傷つける為か嫌がる事である。

発信機を付ける事は、空に宇宙船が飛び、高校生の多くが携帯電話をもつ時代、鳥に、魚に発信機を付けて生態を知ろうという時に、なぜ安い価格で必要な年寄りに付ける事が出来ないのであらうか？

携帯電話が0円で手に入る時代に、実現出来ないのは、行政の怠慢なのであらうか？ はたまたへよこせデモ行進をしない為であらうか。？…

何百kmも離れた所から自分の巣に帰る伝書鳩の、所謂帰巢の生物学的解明がな

されれば、解決するのもかも知れない。

もつと基本なのは、『ボケ』の起きない薬を開発することかも知れない。

『ボケ』で死ぬより、『ガン』で死ぬ方が良いと今日もラジオの中で誰かが言っていた。脳の研究よ。遺伝子治療よ。頑張って更に頑張って、『明日は我が身』である。

『ボケ』予防薬よ。即刻 世に出でよ！

私が『ボケ』ぬ前に！断腸の思いで、毎日カレンダーをめくっているのだから…





### 第三話 同居異床の口と目は！。

目は口ほどに物をいう。と言う諺がある。『いろ目を使う。』と言う言葉もある。目と目があってニコツとほほ笑んでくれると、たまらなく嬉しい事がある。

口には出さなくても、口で話さなくても、好意が伝わる気がして一日楽しい思いが、心の中にみなぎるものである。氣心が知れた者どうしの挨拶は、目と目で充  
分役をなしているのかも知れない。少し離れていても、大勢の人がそばにいても  
二人きりの、この秘密の挨拶は通ずるものなのである。

人によっては、すれ違う時に目を伏せて通り過ぎる人がいる。そうゆう人には  
喉まで出かかった『おはよう』と言う言葉を思わずぐっと飲み干す事しかない。  
誠に目は心を表すシグナルである。

《痛い、痛い、》と隣の年寄りが、目を真っ赤にして飛んで来た。

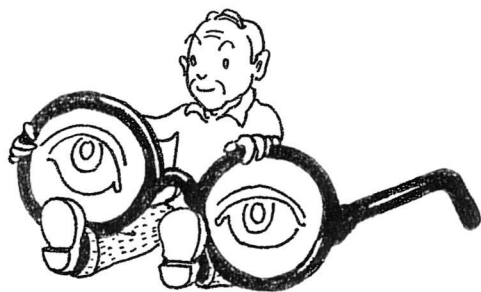
《どうしたのお婆さん、目が真っ赤だよ》

《うん、今薬を付けたら目が、痛んで痛んで……》

《どの薬を付けたんだ？》

と後でよく調べたら目薬ではなく、嗽薬であった。目医者に駆けつけて事なきを

得たが、こわい事である。目薬と嗽薬のビンの格好がよく似ていたのである。何千と神経の集まっている目に、殺菌作用のある嗽薬をさしてしまったのである。これから高齢化社会になりつつある現状に、薬ビン等には『何の薬』と大きくはっきりと明記してほしいものである。人生五十年と言う時代から、三十年も長生き



『眼をとじよ。そしたらお前は見えるだろう。』という言葉を思い出した。

した人生八十年と言われる時代に生きている。私も残された人生を、目と口を大事にして、何か欲しいとき時には、『目をさらにして』欲しがり、『目を奪う』様な美人が通れば、『目を細めて』大いに悦に入りたいものである。老眼鏡の度が気になる年になったが、『口から先に生まれた』人の『口三味線に』乗る事なく『目から鼻に抜ける』私の賢さをもって、『目の黒い』内は対処して行けるのであると。ここまで自負して書いて見て私はイギリス人サムエル・バトラーの言ったあの皮肉な言葉

## 第四話 あわて・ふためき・痴呆症。

今は故人となつてしまつた、有名な作家E氏の話である。

外でタクシーがクラクションを鳴らし、新幹線乗車に近い時間が迫っていた。昨夜の原稿をまとめて眠りに入り、三時間ばかりの目は、未だ開かなかつた。

洗面所にあわてて立って、ぼさぼさの髪にそばにあったピンを開き、頭になすり付けてタクシーの人となつた。

さて講演の時間も迫つて、控室の鏡の前に立って身支度をしようと、バックを空けて櫛を取り出そうとした時である。

『あれれ櫛を入れて置いたが、……あつた、あつた。あれこのピンは、女房の脱毛剤のクリームではないか？……今朝付けたクリームはこれで有つたのではないか？……！』

唯でさえあまり豊かでない頭髮で有る。そこえ今朝脱毛剤をこつてりと塗りたくつたのである。頭の毛が抜けてしまつたら、どうなるのだろう。

さあもう頭を洗う時間等ある訳は無い。やむなく其のまま講演の壇上に立たざるを得なかつた。

話している間も客に心を向けるどころでは無い。：頭の毛が抜けて来ないか、頭に手をやって確認しながらの講演である。

一時間余りの講演を終わって、司会者が言っている言葉も終わるか終わらぬかに、控え室に飛び込んでセッケンをなすり付、洗髪して頭の毛が残っているのを

確認して、やっと生きた心地に帰って来た。

其の途端、今日話したた内容は何なのかすっかり忘れてしまった。

それは『痴呆症の始まりなのか、いやそうでは無い、頭には自信のある自分である。

あのクリームがなす仕業である。』  
と言い聞かして自分を慰めている。

との事である。

数々の有名な作品を残し、人々に感銘を与えたE氏にも、我々と同じ様な失敗があり、ドラマが存在しているのだと、改めて親しみを増した逸話であった。今頃神様の元でクシヤミをしているのかも知れない。



## 第五話 天下分け目の、夏目と福沢。

「ねえ、ねえ、このAさんて隣組のお婆さんだろ！」

『うん、そうだよ。どうかしたの？』

「Aさんの出された香典袋に三万円も入っているよ。親類でもないのに少し多すぎない。」

『え！ただの隣組の付き合いだから、そんなに多く出すとは少し変だね。』

「どうしよう、間違い無いかお婆さんに聞いてみようか？ ……」

隣組の葬式に、受付をしている二人の会話である。

Aお婆あさんに聞いてみると、本人は三千円を包んだつもりである。

夏目漱石の千円札と福沢諭吉の一万円札と間違えた様である。

でも、けろりとしているお婆さん。！ 金持ちは、金持ちである。

私などは、そんな万札を何枚も財布に入れて無いので、間違っても間違う事は無いが、心すべき事である。

それとも最近買ひ物等をした事の無いお年寄りには、お金の価値が分からなくなっているの、「あっさりかん」として居られるのかもしれない。

私なども最近多少長距離の電車に乗ると、幾らでどの位い乗れるのかさっぱり分からぬ事が多い。あまり多くのお金を持って行くのも不用心なので、少額を持って行くと、うっかりすると帰りの電車賃が無くなる恐れがあり、汽車の時間割をひもどいては、運賃を大凡しらべて用意して行く事になっている。

私が中学生の頃親類の者が一万円貯まったから、一生遊んで暮らして行けると言っていたのを思い出した。

第二次世界大戦の終わった、昭和二十年頃は東京大阪間の汽車賃が十五円五十銭だったものが、今では八千五百十円新幹線料金まで入れると一万三千七百五十円となり、887倍になっているのであるから、明治生まれで、百才を越していた私の母等には、想像もつかない出来事である。

『明日は我が身』の私も福沢諭吉と夏目漱石の見分け方は、間違えない様に生きて行きたいものである。



## 第六話 火の用心に、ご用心。

『火の用心。火の用心。』「かっち、かっち」 冬の寒い夜である。

町内を回る火の番当番の人が、回り始めた。夜も八時を過ぎている。

年寄りが当番なのか、何となく拍子木を叩く音にも元気がない。

家の前を通り過ぎて、だんだんとその音が小さくなり、聞こえなくなつて行つた。

『こちらは公報富士のお知らせです。今夜午後八時半頃00町の80才

のAさんが、家を出たまま行方が分かりません。お心当たりの方は、

最寄りの警察派出所にご連絡ください。Aさんの特徴は紺のズボンに

白っぽい上着を着て、拍子木を持っております。………』

十時頃であろうか、市内全般に響く声が、スピーカーから流れてきた。

00町とはわが家の町内である。そういえば家の外の道が何となく騒がしくなつ

て来た。Aさんとは、お婆さんと二人暮らしで、お婆さんは足が不自由との事で

ある。気になるので外に出て見ると、先程火の番当番で回っていた人が、Aさん

であつたとの事。火の番が終わつてもお爺さんが帰つて来ないので、お婆さんが

心配し、町内会長を経て市の広報に連絡したとのこと。当番を終わつて二時間程

過ぎている時間である。

高齢であり、海も近い事であり、町内の役員は責任上、町内はもとより海岸まで見に行ったが消息はつかめず、Aさん宅は寝ずの大騒ぎとなった。

やがて夜も明けかけた五時頃一五km位東の所でうずくまって居たお爺さんを新聞配達の人が見つけて連絡が入り、町内一同安堵の胸をなでた。

お爺さんはわが家に帰る道が解らなくなり、はるばる夜の寒い道を一五Kmも歩いていたのである。引越してまだ余り経たないお爺さんには、夜道を歩くのは無理だったのかも知れない。

町内行事も高齢化社会の進展により、考えて行かねばならぬ要素を、多く抱えて居るのかも知れない。

『今日は他人の身、明日は我が身』と私も小さな町ではあるが、方向音痴にならぬ様頭を鍛えておかずばなるまい。





## 第七話 おっちょこ、ちよいの人と、しゃべる人。

私が小学校の頃は、回虫検査が毎年のごとく、小学校で行われていた。

マツチ箱に自分の便を小指大で取って、学校にもって行くのである。

『ねえ、ねえ、Aさんマツチ箱ない。』

夜の十時過ぎに、K嬢からAさんに電話が入って来た。

『何！こんな遅く、マツチ箱なんて今時無いよ。何にするんだい？』

『検便よお。昔小学校でやっていましたよ』

『今時そんなものに入れては行かないよ。お医者さんに聞いてごらん。』

とAさんは、K嬢に答えて電話を切ったそうである。

それから後日談を、Aさんは講演会で以下の如く喋ったそうである。

彼女はマツチ箱が手に入らないので、空いていた宝石箱に取ったが、翌日医者に行く暇が無いので、腐ってはいけないと冷凍庫に入れて、地方の講演会に出掛けたそうである。帰って、冷凍庫から出すとカチカチに凍りついていたので、電子レンジで解凍したら、包んでいたビニールが弾けてしまったとの事、それを包装紙で包んで、汚いものを「すみません」の気持ちを込めて、リボンをかけて

お医者さんにもって行ったら、〈ありがとう〉とお礼をいって引き出しにしまいこんで、さすがのK嬢も大慌てをしたとの事、医者是有名なK嬢から良い物をもらったと思ったのであろう。誠に笑えぬナンセンス続きである。：

大勢の観衆の中でAさんは、臆面も無くK嬢のおっちゃこちよいぶりを話して、皆を唸らせたとの事である。

AさんとK嬢は赤の他人である。

でもK嬢は、自分の失敗談を隠す事なく、Aさんに話す、心を許した中である。

またAさんも、K嬢の一見恥ずかしい失敗談を取り上げて天下に公表するとは、誠に凡人の私には出来かねる事である。そこに凡人には分からね、心を許した真の友情が潜んでいるのかも知れない。

誠に子供の様な天心爛漫な心の持ち主のK嬢が、世界の子供の為に悪戦苦闘しておられる事を聞くと、前途の幸せを、祈らずにはおられない気持ちになってきた。



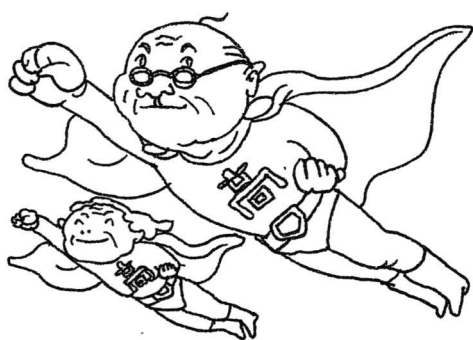
## 第八話　ゆめゆめ高齢者を馬鹿にするなかれ。

『年寄りの冷や水。』『昔の事を言えば、鬼が笑う。』『老いては子に従え。』  
そして『年寄りの厚化粧。』：等等など、実に年寄りを侮辱したことわざが多い。  
高齢者を褒めたことわざが無いかと、記憶をたどって見ても思い出せない。  
確かに高齢者は動作にもぶく、記憶力も劣って来ているのが現実かもしれない。  
一日に十万個の脳細胞が死滅する等と言われると、殊更に弱くなる。

でも最近の研究では、歳を取っても環境や自分の意志の持ち方によって、脳は退化しないのだと言う研究が、イギリスの権威ある科学雑誌ネイチャーに載っているとの事である。そこで多いに励まされ、有名な故人をたどって見た。

古典力学の基をなす万有引力を発見したニュートン（1643～1727）は四十二才で万有引力の法則を発見し、六十才から王立教会会長を二十四年間も勤めた。  
モールス信号で有名なモールス（1791～1872）は、五十三才で公開通信を行い大成功を収めた。電文は聖書の言葉『神は何をなしたまいしか』であった没九十一才。  
植物学者である牧野富太郎（1862～1957）は、採取した植物標本四十数万点に達し、日本植物図鑑等の著書も多く、九十五才で亡くなるまで活躍しておられた。

永井荷風は八十才。島崎藤村七十一才。土井晩翠は八十一才。エジソン八十四才。与謝野晶子六十四才でそれぞれ没。宮城道雄は五十九才で日本代表として、パリの民族音楽舞踏祭に出演し、盲目の演奏家とし有名であったが、六十二才で不幸事故死に会われた。これらの方々は死の直前まで、多いに活躍された方々である。



人生五十年の時代に、それ以上の歳まで活躍された方々である。人生八十年の時代に生きる我々である。六十や七十では、まだまだ鼻垂れ小僧である。『病は氣から』と言われている通り、なりすます事なく、過ごして行きたいものである。高齢者介護法を制定して、首相森君等は高齢者対策は、完了したと思っているかも知れないが、高齢者に生きがいを与える事こそ政治に携わる者の最も必要な事で、直ちにそれらの政策に取り掛かる事こそ、選挙対策に多いに活用できる事では無いかと思っている。…高齢者よ！今こそ決起するときぞ。…

## 第九話　生きがいが、走ってる。

「あら、今日もお会いしましたね。お元気で何より！」

『家で留守番して居るより、出掛けた方が私に合っている見たい。』

「あら、いい柄ねえ。ちょっと入っている縞模様がとてもモダンだわ。」

『ちょっと、派手かしら……と思ったのだけど！』

「そんなこと無いわ。ねえ、今度売っている所教えて」

『それじゃあ、今度ご案内しますわ。』

東京の本郷に墓があるので、東京駅からたまに乗るバスの中の会話である。乗車時にお金を払うのに、千円札でお釣りをもらうのに、まごまごしている私の傍らをパスを見せながら、よちよち歩いて行くお祖母さん。会話の相手もパスを見せて乗車したお祖母さんである。幸い定員の半分も乗せていないバスは、込み合う車の間を巧みに抜けて走って行く。次の停留所でもパスを見せて乗り込んでくるお祖母さんが結構いる。

どうゆう条件でお祖母さんにパスが渡されるのか、都民で無い私には皆目解らないが、なにしろお年寄りには、ほとんどパスを持つて乗車してくるのである。

揺れるバスに巧みに身を合わせながら、ぐるりと中を見回して、知人が居るとその側の座席にちょこんと座って先程の会話が始まったのである。

手持ち無沙汰で、する事も無く座っている私の耳には二人のお祖母さんの会話が遠慮会釈無く飛び込んでくる。どうやら後ろに座っているお年寄りカップルも同じ乗り合わせの仲間らしい。楽しい会話を乗せてバスは走って行く。



お年寄りに無料のバス定期券を発行している  
と見られる東京都の福祉行政の現れである。  
東京の中に何億円もかけて、年寄りの施設を  
作るより、ほとんど満員にならないバスの座  
席を利用して、走る談話室を提供する方が、  
ずっと生かされた利用方法であろうと、思え  
た。年寄りの生きがいとは、やはり自由に動  
け、自由に話せる身じかな物の中に存在する  
のかも知れない。杖を突きながらも自由に  
動ける幸せを、私もお年寄りに教わった様な  
間、二人のお年寄りは見えなくなっていた。

## 第十話　これでは、合格点七十点ですが。

『六月で、また帰って来ちゃた!』

「なぜ：　病気は良いの？　病院は空いてるのでしょ。」

『厚生年金の現況届けの証明を市役所でもらうのに、誕生月の六月に居ないと確認書類を出すことが出来ないもの：』

長い間リユウマチに苦しんでいるMさんは、毎年出す現況届けを市役所で証明して貰う為に、毎年六月には病院からアパートに帰っていた。一人暮らして自分の事をしているMさんに取って、年金は唯一の収入であり欠かせぬものである。

証明は代理人でも貰える事だと思うが、入院して誰もいない部屋に証明の書類が来ても分からず、届けが出来ない恐れがあるからだ。現況届けは、市役所で受給者が生存しているかどうかの証明を、確認する為にすることである。

介護保険の様に健康か病気の程度等を知るためのものではない。

私も六十五才を過ぎて年金を貰う様になり、毎年誕生月には市役所に出向いて生存している事の証明を何回かして貰っていた。ところが昨年から現況届けの書類に自分で署名して届ければ良い様になって来た。市役所に出向かなくても良い

様になって来たのである。しかも自分で署名出来ない人は代理人の署名で良いことになって来た。リュウマチで指が不自由になったMさん等にも朗報である。

本人生存の確認を署名で済ます様にしたことは、封建的な日本の役所としては画期的な事と百点あげたい。でもMさんの悩みはこれだけでは済まない訳である。

入院して空き家に書類が来ても、署名して届けられないわけである。

インターネットで物が買える時代になって来た。本人確認の為に書類を送らなくても、居住市役所に社会保険業務センターから、コンピューターで接続確認出来ないものなのだろうか？ 年金受給者も年々増加している現状で、書類発送転送等の手間は国家的に見れば大変な損失と思うし、署名確認よりもっと確実な作業と思うのは、自署確認まで進めた人に失礼な思いなのだろうか？

もうちよっと頑張って、百点満点にして、Mさんの悩みを解決したいものである。





## 第十一話 知って幸せ？ 知らぬで幸せ？

人間の遺伝子の解明も、此処二、三年の間に全部解読される様だと、テレビでは放映されていた。病氣と遺伝子の関係がだんだんと判明されて来た現在、米国のあるご婦人は、遺伝子で乳癌と子宮癌になる確立が高い事を知り、不安でたまらず、両乳房と子宮を摘出し、安心した生活に戻った事を報じていた。

また黒沢明監督の映画『生きる』では、ガンで数カ月の命しか無い事を知り、最初の何週間かは絶望の中に自堕落な生活を送るが、それに嫌氣がさし、ある日猛然と残り時間を意識し、町の人たちの為に小さな公園を作ろうと決心し、完成した公園のブランコで、一人息を引き取るというストーリーである。

彼は何十年と無く、長として漫然とハンコを押し続けた日々よりも、死という残り時間を知って、市民の公園を作ろうと猛然と働いた数カ月の方が、はるかに充実した人生を送る事ができた瞬間であった。彼がもっと早く残り時間を知っていたら、どんな人生を送っていたのだろうか、と思わせるものである。

今年も月めくりのカレンダーを、何の気なしに五枚めくり終えてしまった。私が末期ガンと宣告されたら、月めくりカレンダーの一枚はどの様な重さになる

だろうかと、重さのない時間の貴さと、日々の自分の心の足りなさを思わせる瞬間である。科学の進歩は、有形なるものの死をあらかじめ知らしめる手段を手中に収めつつある。我々はそれをどう利用すべきかに、係っている時代に生きようとしている。健康体で有ると、今日がやって来たから明日もやってくる、と何の疑いも無く生きていく日々で有る。死の時を知らぬ動物の様に生きている事が、

一種の幸せな事かも知れない。

脳溢血での突然死を望む人が多いのも、そのせいかも知れない。

死を知らず漫然と生きる人生を選ぶか、命という限り有る残り時間を知って、有形なる自分の残された人生を充実した日々とするのか、ガンに拘らなくても、人類はその選択をせまられている時が、目の前に来ているのである。

DNAで宣告されなくても『残された時間』を意識して、心改め、日々高まる充実した時間を、送る人生にしたいものである。



## 第十二話 空きの巣症候群

ツバメ返しの早業で飛んで来た親ツバメ、顔よりも大きな口を開いて鳴く子ツバメ、その口に素早く餌をやりまた飛んで行く親ツバメ。父ツバメと母ツバメの餌やりの風景に私はこころしく会はないが、懐かしい風景である。

『空きの巣症候群』私はこの言葉を知らなかった。でもこれは心理学的に立派に通用する言葉の様である。あの賑やかだったツバメの巣、やがて子ツバメが巣立ち軒下に残されたガランとした巣、何処にか飛び去った親ツバメ夫婦の存在。

子供達を幼稚園、小、中学校、高等学校、大学と必死に出した後の夫婦、あのガランとしたツバメの巣の様に、存在していても空虚な家庭、夫が定年を迎える頃の我々の家庭生活を指し示している様な、意味深な言葉である。

家庭のため、子供の為と言いつながら、何時の間にか仕事一本槍になり、定年を迎えた夫、子供こそ生きがいと、一生懸命に子供達に目を向けていた妻、巣だつてしまった子供達、夫婦にとって、焦点の定まりかねる家庭の巣である。

巣立って行った子供達に変わって、空き巣に常時座り込んだ定年を過ぎた夫、二人だけの生活という、大きな変化を迎えた夫婦に取って、まさに正念場の心を試される時である。永遠の『愛』を誓った結婚式の昔に、立ち返るべき時となつ

ているのかも知れない。『愛とは己の利を求めず』と聖書には書いてある。

老い先の見え始めた夫婦に取って、相手に本当の『愛』をもって接せられる夫婦こそ『空きの巣症候群』を立派に卒業出来る、夫婦なのかも知れない。

子供の巣立ち行くその時まで、必死になって、わき目も振らずお互いに努めた夫婦こそ、子供というハシゴを取られた時に、空き巣の中で心を結び合わさる手段に迷うものかも知れない。子供達も新たに家庭という巣を作っている。ツバメの様に簡単には南の空に子供と一緒に飛んで行けないのである。

まさに老年期を迎え様とする時こそ、夫婦に取って真の『愛』の必要な時かも知れない。

残された鳥たちの空き巣を見ながら、あの鳥たちの夫婦は、今頃どこでどうしているのかと、ふと思う様になるのは、『空きの巣症候群』とは言えぬと頑張っている。



### 第十三話 他人か、はたまた夫婦か。

夫婦は他人か、否か？ という私は余り考えた事も無い問題意識ではあるが、報道機関でアンケートを取った結果を報じていた。

男は七十%の人が、妻は他人で無いと思っているのに対して、女は四十八%の人が他人で無いと答えていた。逆に言うとなりの人は夫を五十二%の人が他人と思っている。此の結果は私にとって意外な結果であった。

男の七十%の立場で考えると、夫婦とは結婚して精神的に、また伴侶的として、男の自分の考えは相当程度、妻である女性を理解していると感じている。したがって以心伝心と言うか、あまり自分の考えを言わずに『俺について来い』的な考えと行動を取り勝ちなものである。

一方女性の方は、五十二%の人は夫である男性を他人と思っている。夫婦なのに他人と同じとは怪しからん。と思いがちであるが、心理学的に考えるとこの女性の方が、正しい考え方の様である。

他人的付き合いは、他人との関係をうまくする為に、意志疎通の会話等を通じて一生懸命に努力するものであり、したがって夫婦の関係がよい場合が多い。

又夫婦の関係は何時も変化するものであり、夫婦喧嘩等をした場合においても、他人との関係の如く、会話その他を通じておのずと修復に努力するものである。

一方『俺について来い』方式では、喧嘩をした時等、必ず心に『しこり』が残って、一時収まったとしても、後の関係は以前通りにはならないものである。

日常の生活の知恵として、夫婦でも他人どうしの様な在り方が必要なかも知れない。でも夫婦としてお互いの心のもち方としては、他人に対する心のもちようではなく、足らざるを補い合う心で、暖かな家庭を築く心が必要条件であろう。

日常生活のコミニティーでは他人の如く、でも心の結び付きでは、神の合わせられた伴侶の如く、真の愛で結ばれた夫婦となりたいものである。

これからの家庭の中に、他人との交わりの様な賢さを参考にして、私も百才まで、円満な家庭を築いて行きたいものである。



## 第十四話 止めて、止まらぬエンドレス

『わしの小さい時は、この川をスイスイと泳ぎ渡ったものだ。

近ごろの若い者は、怖くて川の中に足も入れんもんな。』

窓を明けると初夏の日差しが眩い様に差し込んでくる、川べりの碁会所の二階である。碁会所の人達は「又、爺さんの何時もの同じ自慢話が始まった。」と、多少耳の遠くなりかけた爺さんの話に、くす、くすと下を向いて笑いながら白黒の並べられた盤面を見つめて居た。

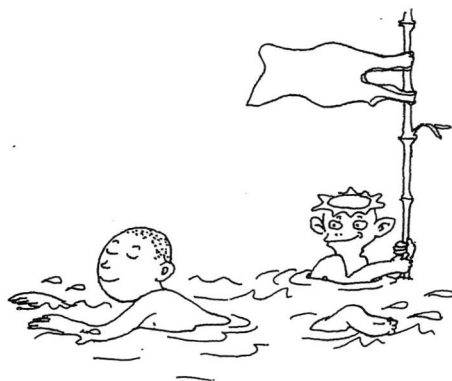
私も何度か聞いた話である。でも此れを話す爺さんの目は輝いていた。

七十代後半か、八十代のお爺さんである。奥さんと死に別れて二十年、子供達も独立してお爺さん一人暮らし、年金生活で暇を持て余し、あまり好きでもなかった碁を打ちにでかけ、時間をつぶして居るのである。

でも若い頃は、水泳はもとより、乗馬、テニス、野球と、結構スポーツにのめり込んで居た人の様で、それらに話が及ぶと別人の様に目が輝き、昔に帰った様にデエスチャーを交えて、その頃の事を誰彼となしに話しているである。

まさに碁をそっちのけで、滔々と話す思い出物語りは、お爺さんの若かりし頃を

彷彿とさせるに充分な話振りであった。でも碁会所の人達は爺さんが次になにを話すのか皆知っていた。一つの話が終わったかと思うと、また話のスタートに戻り、リターンの止まらない壊れたテーブルコーダーの様に、繰り替えされるのである。小さなこえで話す碁会所の人達の話の話を聞いているうち、年寄り特有な現象と聞きすてるには、忍びない想いがした。



お爺さんが話すときのあの輝いた目、それはその人の輝いた過去の人生を現しており、笑うべきものではなく、我々が学ぶべき『種』が潜んでいるのでは無いかと想われた。エンドレスで語られる爺さんの輝いた人生、時代も価値観も異なる現在であるが、その中から良きものを汲み取る心をもってこそ、自分の人生の糧として明日に備えられるのでは無いかと想われた。

た人生を、何時の日か孫たちに、エンドレスで語る日が来るのかも知れない。



## 第十五話 脳味噌の移り変わり

ベトナムで地雷にあって足を無くした少女が、生き生きとした眼でギターを弾き、小さい子供達に聞かせて居る姿が放映されていた。自分は足を無くしても、弟達に妹達に、生きる喜びを、音楽を通じて伝えたいと言う願いを語っていた。私も年を取ったせいとか、何となく涙もろくなった様だ。この子供達を見て目頭が熱くなるのを、押さえきれなかった。感受性が強くなったのかも知れない。：いや理性が衰えて、押さえ切れなくなったのかも知れない。：

先日ラジオで浜松医大の高田先生の『脳』の話聞いたことがある。それによると外側の理性を司る大脳皮質の部分と、内側の感情等を司る部分とあり、感情の中で怒る部分や喜ぶ部分や運動言語等、機能別にちゃんと別れている様である。外側の大脳皮質は内側の感情を押さえており、そのバランスが良く取られている必要があるとの事であった。へくヨクヨしたりへストレスが溜まると内部からの信号により大脳を溶かしてしまう事になり、その結果感情を押さえ切れなくなる様である。私が涙もろくなったのは、そのせいかも知れない。でも怒りばくなったとは、自分では少しも想っていない。むしろ感情が豊かになったと想い

たいのである。赤ちゃんの頃はまだ大脳が発達してなくて、怒りっぽくそして泣きやすい訳が、理解出来た様に思った。

最近『脳』を外から観察する方法として、磁器共鳴装置を使って『脳』を外から観察研究することが出来る様になり、今まで一日十万個の脳細胞が死ぬと言われて来たけれど、楽しい生活やら、光りを浴びる生活等により、歳を取っても増える事が分かって来た様で、年寄りには非常な朗報であると言えそうである。



『脳』の研究はこれから益々盛んになり、我々の心のもち方、環境の在り方、年代による教育の在り方等、人類に福音をもたらす成果が出て来る事が期待できそうである。脳という心の入れ物に私はもう少し関心をもって接して行きたい。そして人類が戦争をする愚かさを、あの少女の音楽を心の中で確りと聞きながら、私はボケで流す涙で無い涙を、流し続けて行きたい。

## 第十六話

### ロング

アンド

### シヨート

昭和二十一年、私は身延山の高台の境内に立っていた。終戦後一年余経った秋の夕暮れ時、白のブラウスに足首が見え隠れする黒のロングスカート履いた女性が歩いて来た。私は一瞬意気を飲む程の驚きをもって、その女性の美しさを眺めていた。戦中戦後の物資のない、モンペ姿の女性しか見ていない私の目には、ロングスカートの女性の美しさを、一種の脅威をもって眺めていた。

ロングと言う言葉を聞くと、私の脳裏に浮かぶ第一印象ではある。

さて私は、女性のスカートを書く積もりではなかった。世に言う長電話、長話を書くつもりであった。大体私を含めて男は、余り長電話はしないで、用件を終わると話す言葉を無くして、電話を切るものであるが、女性はよく長電話を話しているものである。聞くとは無しに聞いていると、用件らしきものの後に、次ぎから次ぎへと話題が変わって行くのである。公衆電話の時は甚だ迷惑である。

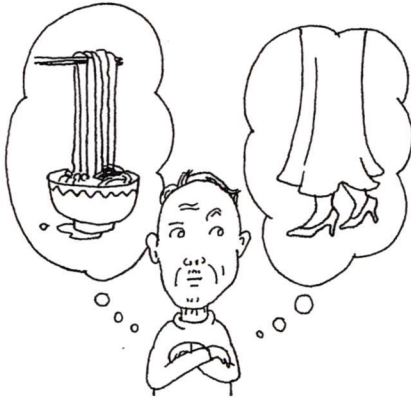
なぜ女性はあの様に長電話をするのか、男は用件のみ、女性は電話を通じて話題を変え、相手とコミニケーションをよくしているのである。その点女性の天性と言うのか、男の持ち合わせない人を引き付ける技を、備えているのである。

電話に限らず話でもそうである。ただ余り長いので、肝心の用件がボケてしまふ欠点を孕んでいるが、適宜の長さの話題は、人を引き付ける巧みさをもったツールである。営業に女性が向いている傾向が強いのは、そのせいかも知れない。営業と言えば男は、酒席を利用して客との交流を計るのが多いが、女性は長電話でも、その目的を果たせるのかも知れない。その意味では面白いものである。

私はあの時、ロングスカートの美しさに引き付けられてしまったが、女性の長電話は時間の無駄と軽蔑していた。

でも人と人との心の交流を計るものは、言葉であり態度である。時と場合にも寄るが、誠実な美しい言葉はショートよりロングが、私はよい様に思えて来た。

ロングという言葉聞いた時に、おソバを思い浮かんだ人がいた。たった一つの言葉でも、人それぞれの思いがある様に、一つ想ういの心になる為めには、長電話も、長話しも必要な事の様に思えて来た。



## 第十七話 大事なお口の話

『天皇制の下、神の国の国民』 私が生まれて二十二才の時の終戦まであらゆる機会に聞かされた言葉である。その言葉により日本軍人百五十五万一般三十万の人たちが、命を落としたのである。それから五十五年間、西暦二千年五月に、改めて日本の目指す理想の国民像として、時の首相の口からこぼれ、国を揚げての大騒ぎになっていた。口から出た一言の言葉の恐ろしさを、改めて感ずるわけである。大学の弁論部出身の首相にあえて申したい。もっと脳の言語中枢神経に血液を送って確りしなさいと！その為に舌を一杯出して、左右一杯に十回位動かす運動を朝夕しなさいと、米国では最近流行って、皆が実行している様ですと、あえて言いたい事ではある。

さて以上は心と口との結び付きが重要な問題であるが、健康的に口中衛生的に特に大事な歯に關しての問題である。日中は歯の成分に等しい唾液で、絶えず歯を洗っているのであるが、睡眠中は唾液の分泌が少なく、口中は格好のバイキン培養器となっているので、朝は何兆というバイキンが居るとのこと、新婚さんも朝の接吻は、嗽をしてからが良さそうだと、の事です。よ。　　：　　念のため。！

先日昼食後、歯を一生懸命磨いている人がいた。私は昼食後は磨かないので、8020（八十才二十本自分の歯）運動提唱者と思って感心していると、歯は既にボロボロでインプラント（人口歯根）治療に東京まで通院しているとのことである。インプラント施行後の歯磨きは特に必要の事であろうが、真に後の祭りの歯磨きではある。後悔先に立たずと言う言葉を思い出した。ご苦労様です。！



らずに、舌を大きく出して、左右に一杯振る舌の体操を今後も続けて行きたい。

食べ物をよく噛む人は長生きをする。

とよく言われるが、口を動かす事により脳に血流がよく流れる事と思われる。四分三世紀を生きた私も、絶える事なく脳に血液を送り、絶えず考えさせ、正しく話させる毎日になりたい。

幸い自分の歯が、二十七本位残っている私も、前者の轍を踏まぬ様に昼食後も、歯を磨く習慣を養う必要を感じ始めている。みっとも無い等と体裁を張

## 第十八話 光りを浴びよ。富士発

へお早う ございます。へ

寝ぼけ眼で新聞を取りに玄関を開けると、前の家の奥さんが犬を散歩させながら我が家の前を通り過ぎ様としていた。

《お早う ございます。随分早い散歩ですね。》

と寝坊して体裁が多少悪いが、挨拶を交わして引っ込んだ。

雲一つ無い晴れ渡った朝であった。朝陽を浴びて海岸を富士山を見ながら散歩されて来た様である。五月の朝風は、さぞ心地よい散歩ではあった事だろう。

そう言えば昨日のラジオで、半年太陽の出ない北欧の冬にノイローゼになった人が、イタリアの明るい日差しの元で生活すると、病気が直ってしまうと言うことを報じていた。

歩くと言うこと、陽を浴びると言うことが脳の活性化に非常に良いと言うことが脳の研究で解かって来たらしい。足を動かすと言うことが、足を司る脳の部分に血流を多くもたらす事になるらしい。それによって脳の神経の分岐を増やし、活性化さすと同時に、その部分の廃棄物を持ち去ってくれるとの事である。

朝寝坊して、じっとしていれば、筋肉は衰え、脳も萎縮する訳である。  
骨折等で寝たきり老人になればボケが来るのも必然なのかもしれない。

太陽は誰の上にも、平等に降り注いでくれる。光り治療等受けなくても、左に富士山を眺め、右に駿河湾を眺めながらの散歩道は日本一の散歩道では無いかと思っている。

私も会社勤めが終わったら、朝早く散歩する仲間を作って、朝日を浴び脳みそを活性化したい。イタリヤ療養はもろもろの点で無理だと思えるし、日本語が話せないのは、そちらでノイローゼに成りかね無いと思うので、美しい富士山を独り占めしている日本一の散歩道で満足している。

こうして見ると貧富の差も無く、老若男女の差は無く、人の様にワイロで動かされず、誰にも平等に与えられる自然の恵みに、

改めて感謝せざるを得ない。富士山よ、何時迄も平和の表徴でいてほしい。





## 第十九話 世間体と言うやつ

《お祖母さん。如何ですか？今度デイサービスの施設が

出来たので利用しますか。》

へいえいえ。祖母は、僕らで交替に見ますから、そんな事は結構です。》

と長男らしい人が顔を出して、あっけない返事である。ちよつと離れた地に確かに立派な男の子供さん二人が、別に家庭を持つている。奥さんを含めて四人が一週間交替で一人暮らしのお祖母さんを診に見えている様である。実の子供である息子は、親元が懐かしいのである事だが、義理の母に当たる嫁さんの方では文句も時々出る様である。今のところ幸いな事にお祖母さんは、昔お祖父さんと一緒に行った散歩道を、行き来することが出来るだけの体力は持っている。

確かにデイサービスはまだ必要で無いかも知れない。でも嫌々看病してくれる様では、受ける方としては気まずい思いに違いない。施設に余裕があるなら、少しでも利用させてもらって、リハビリ体操やら、昼食を御馳走になって、気分を転換するのも良い方法では無いかと思われる。日本人は変な所に見栄を張ったり、

世間体を気にするものである。もっとフランクに、お祖母さんが良いと思われる方法に持って行くのが良いのではないかと思われる。元気な時には今まで社会の為に尽くされたお祖母さん、世間体等は乗り越える勇気を持って欲しい。



『時は得難く失い易し。』という諺がある。お年寄りには遠慮等せず、公共の施設を大いに利用されて、何時迄も元気でいて貰いたいものである。

一人で孤独にならずに、気楽に話せる人をその中から作って、お互いに元気な毎日を送って欲しいものである。

私もその様な時が来たら、大勢の友達を作って、文芸サークルでも、テレビ鑑賞会でもやりたいものである。

せっかく生かされているこの地球で、生きて来た証しを共に掴んで、あの世の土産にしたいものである。あの世でもどんちゃん騒ぎをしたいものである。

## 第二十話 『アリガトウ』の一言を

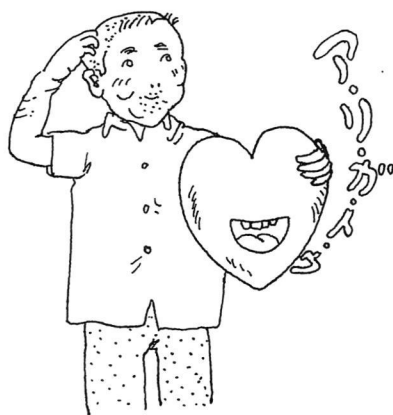
会社の前の路は狭い。大型車が通るとすれ違う事が出来ない。それで路沿いに有る側溝に所々蓋をして、車がすれ違える様になっている。対向車が来て、こちらが退避所で待っていると、感謝の手を挙げて通過して行く車がいる。

気持ち良いものである。そうかと思うと譲って貰ったのに、知らん顔してすまして行く輩もいる。人それぞれで、あるかもしれない。でもあの挨拶せずすまして行ってしまった人も、何となく気心がすっきりしない事と思いたい。

アリガトウの一言で、一つの事をすっきりと片付けて次の事に進む事が出来るからである。特に年寄りから言われる感謝の言葉は、身に染みて感ずるのは私ばかりなのだろうか？

アリガトウと言えない理由を私なりに分析すると、一つは感謝する気持ちが無い事である。これでアリガトウと言えば欺瞞に等しい。なぜ同じ行為を受けるのに感謝の気持ち起きないのか？その人の生い立ちが問われる事になりかねない。家庭が、家族までも疑われられる可能せいがある。感謝を忘れない家庭にしたいものである。二つ目は、その言葉を言う事が、気恥ずかしい思いがある事である。

それはどちらかと言えば、男性に多い事が多い。感謝する事と謝る事と同意語的に感じているのでは無いかと疑いたくさえる時がある。三つ目は、人を侮っていると感ずる事がある。おまえ何かに感謝する事は無いのだと、心に感ずる事さえるのは、私の僻みから来ている事なのだろうか？ 正に男も色々、女も色々である。たった一言でよいアリガトウの一言は、どんなに相手に良い印象を与えるか、全く知らない人でも、その人の人柄が美しいものと感ぜさせるものである。



満百歳を過ぎて死んだ母が、闘病の最後までアリガトウと言ってくれたのは、私にとつての最大の慰めになっている。

心は言葉によって表されるものである。

とかく口数の少ない私も、話すべき事を確りと弁えて、感謝の心はアリガトウの言葉で表し、これからの世の中を渡って行きたいものである。

『感謝する心』　そしてそれを素直に口

で表せられる自分として、これから生きて行きたい。

## 第二十一話　支えられる

五月の初めに駿河湾の一番奥に当たる原の海岸で、会社の連中と網引きを行った。朝五時三十分よりの網引きである。幸いお天気も良く気持ち良い朝であったが、でも一回にかかる魚は、小さいのを除くとせいぜい十匹程度で、腕に覚えのある連中が、早速ピチピチ跳ねる魚を料理していた。慣れない私は、お刺し身にした魚はさぞおいしい事とは思うが、ちよっと口にすることが出来なかった。

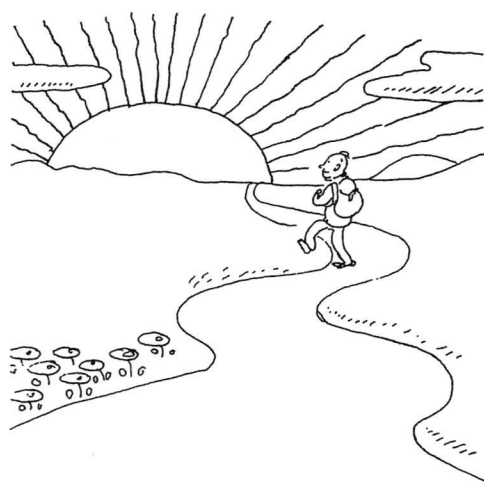
実は私が満七十才になった時に、ちよっと変わった計算をして見た。

オギヤーと生まれてから、日に換算して二万五千五百五十日、そして時間に換算すると約六十一万三千二百時間になる。それに現在更に加算されているのである。

そして二・五日に一匹の魚を食べたとすると、一万匹の魚を食べたことになる。生きているを目の前にしては食べられなくても、これだけの魚の犠牲の上に私は生きているのである。尚この他にちよっと換算するのが難しいが、牛や豚のお世話話にも散々なっている訳である。また野菜・果物等私の為に多くの命が断たれているのである。この世に生まれた時から厄介になったお産婆さんを初め、多くの方々の目に見えない支えがあつて、私の今日があるのだと改めて知らされた事で

あった。家族、身内、隣組、そして地域、教会、病院、学校の支え、さらに企業等の支えの上に私があった訳である。肉体的な支えと共に、心の支えとして人々の優しさと、それを支配される、神の愛があった事を忘れる訳には行かない。

私は、中学生の頃、三年間に渡る足の病気で、自殺したい衝動に駆られていた。



小さい時とは言え、私がこれら多くの命の犠牲の上に成り立っている事に気付かず、自分一人の事のみ考えていたのである。私もこれから歳を重ねると、肉体的衰えから、人の支えを乞わねばならぬ事も多くなるかも知れない。でも今まで私を支えて戴いた神様、そして犠牲になってくれた命の為に、生きて、生きて少しでも私も誰かの心の支えとなって生きて行きたい。この弱い愚かな者でも、支えられ生かされた喜びを、多くの方々と共に分かち合える者として、日々旅する年月でありたい。： 信ずる神と共に：

## 道 標

昨日僕が生きて来た様に  
今日僕は 生きている

先人がたどって来た道を  
歩みながら 一步一步 生きている。

昨日の僕から 脱皮しようとしながら  
惰性で生きている 日々

今日こそは 今日こそは

先人の歩んだ足跡に

一步踏み出した私の足跡を

先人の立てた道標に

わたしの道標を 一本立てて見たい

くずおれる 道標かも知れない

貧しく 弱いわたしの道標かも知れない

でも それで良いのだ

## 感 謝

老人化社会が到来しようとして  
いる現在、お年寄りに起きた  
問題は、私にとって笑えぬ事  
となりました。

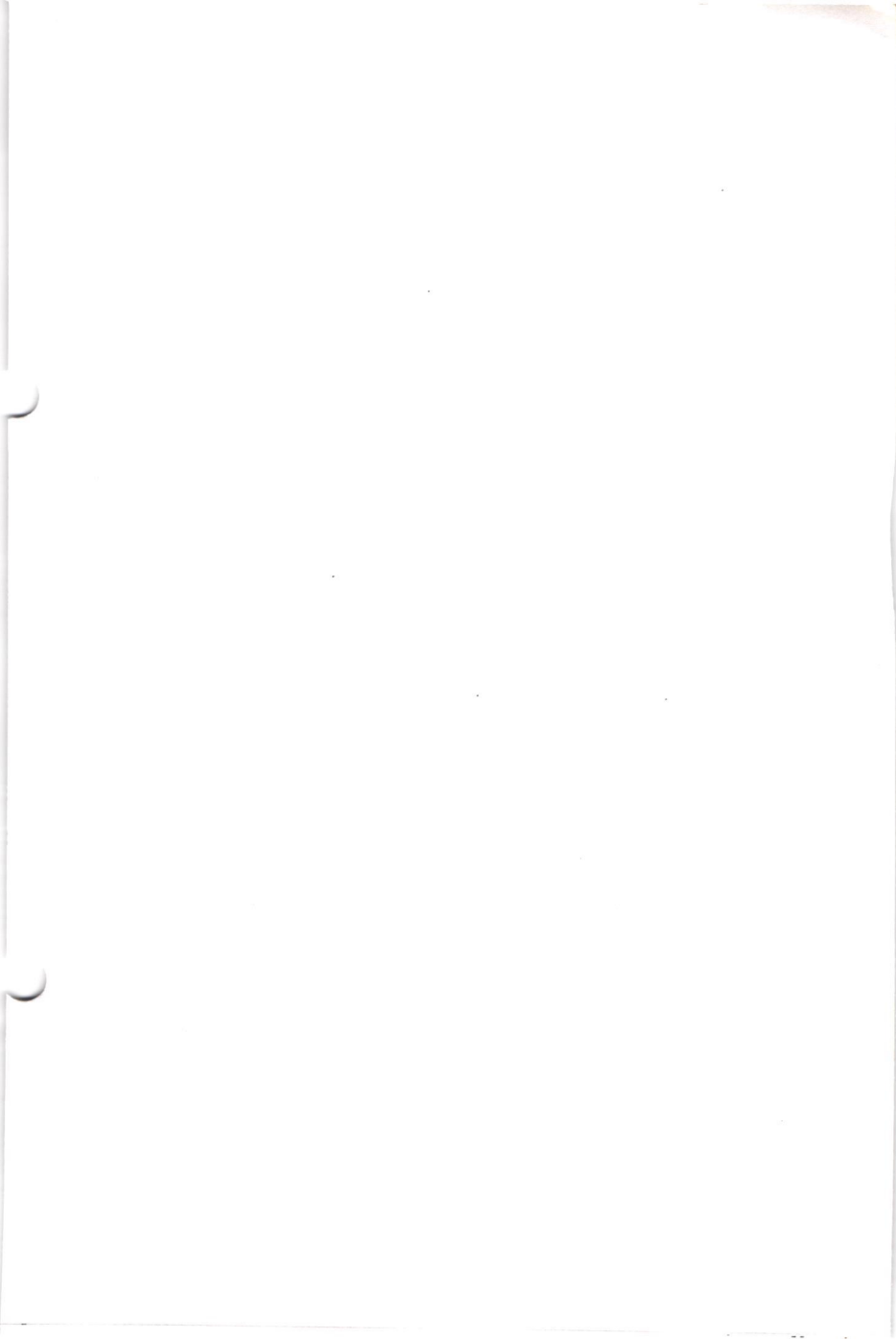
少しでも留めて参考にしたいと  
書いて見ました。

尚挿絵は、従兄弟にあたる直人  
君の奥さんの宴さんが、育児の  
忙しさの中で、協力して戴いて  
挿入刷ることができました。

平成十二年六月

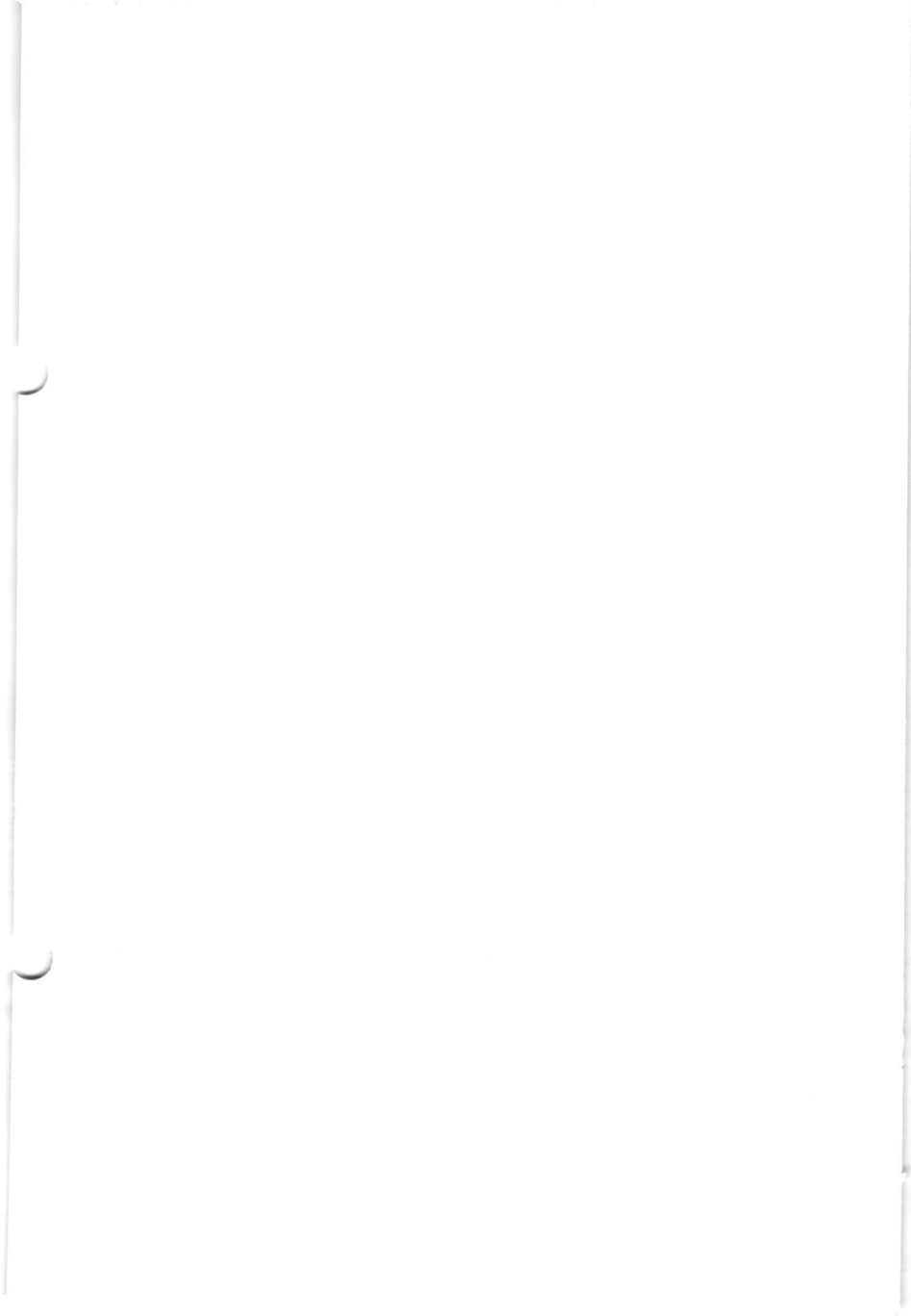
文 城 所 進

挿絵 城 所 宴





小浜島探索記



## 『小浜島探索記』

先手必勝。先んずれば敵を制する。

まさに日本語は便利なもので、自分に都合のよいものを与えてくれている。でも、負けるが勝ちという言葉もある。急がば回れ、という言葉も存在する。

朝のテレビドラマ『私の青空』を時々見て、泣かせられたり、笑ったりした私は、四月から始まる『ちゅらさん』が、その配役やらストーリーから、また私の小さなハートを揺すぶってくれるものと期待していた。

『ちゅらさん』の主人公、古波蔵恵里さんの生まれた土地である“小浜島”は、たまたま訪れた石垣島より快速船で三十分足らずの島と聞いて、私の心は踊ったのである。そしてまだ全国に放映されて、人がその地を、その島を、ヒロインの生家を、見てない時に、私は先に頭のコМПЮТЕРにインプットして、放映の時一人ほくそ笑んでいたと、まさに、先手必勝。先んずれば敵を制す。を選んだのである。……それが、そんなことが、何の利益にもならないと知りながらも、まさに人間は不可解なものであり、かく言う私自身も不可解な存在ですらある。

そして二十一世紀になったばかりの一月六日、私を乗せた快速船は十時三十分

石垣島の岸壁を離れた。私たち夫婦と小学一年生の孫が、生まれて初めて訪れる島“小浜島”（沖縄県八重山群）目指しての船出である。天候は回復基調であるが、風が多少強く、三十人乗り位の快速船は、船尾にスクリュウの巻き起こす滝の様な水洪きを上げ、サンゴ礁の浅瀬の中に出来た細い水路を、巧みに右に左に曲がりくねり、時々波頭にぶつかるショックを我々に感ぜさせながら、快調に目的地に向かって走っていた。

内地では見る事のできない美しいエメラルド色の海、その中に存在するサンゴの浅瀬は多少薄黒く、立てば立てそうな深さにさえ見える、まさに透き通った海であり海底である。また行路の近くにある、サンゴの星の砂浜で有名な、竹富島周辺の白い浜辺が、緑の木々の合間に見え隠れして、我々を近く迎え、また遠く見送ってくれていた。

揺れる事をおもんばかり、船は多少大回りして“小浜島”の船着き場に着いてくれていた。昨日の小雨とは異なり、南国の暖かな太陽が我々を出迎えてくれ、サンゴの島の砂は白く、握り締めた砂はさらさらと、足元に落ちていた。

港には長く伸びた堤防の外、設備らしいものは何も無く、訪れる知人を迎える四、五人のひと、我々観光にきた者を島内案内するマイクロバス一台だけで、

売店や切符売り場も無く、俗化されない純朴な港が、我々を迎えてくれていた。

バスに乗り込むと、運転手兼ガイドのおじさんは、まずお客の出身地と沖縄滞在、また小浜島来訪の有無等を聞いていた。沖縄に来てまだ7ヶ月の人、神奈川県からの観光客、我々静岡の人間等のそれぞれの家族で、過去に小浜島を訪れたのは、石垣に居を構えている医者である息子一人であり、患者を見に訪れた事はあるても、観光としては訪れていなかった。島を知っている人がほとんど無いので、運転手君は安堵したのか、モンキーバナナのなっている道端の木のそばに、バスを停めてくれたり、小学生二十七人と中学生十三人の生徒に先生十三人という構成の、島唯一の学校を説明しながら、立派な建物の校舎のそばを通っていた。また『ちゅらさん』ロケの行われた沖縄特有の亀甲墓のそばを通り、先祖を崇拜する念の厚い沖縄の人たちの思いを話していた。医者である息子は、あの墓の形は女性の子宮の形にもなぞられており、死後は生まれた所に帰る意味もあるのだと説明していたら、他の客もその意味の深さに驚いていた。

バスはさらに『ちゅらさん』のロケが行われた、ヒロイン古波蔵恵里さんの生家の傍らを、速度を落としながらその説明をしていた。沖縄特有の屋根瓦を持つ明るい、質素なたたずまいであった。ドラマの生まれた島、ヒロインの生まれた

家、その所に自分の体を、自分の時間を、自分の心を、その中において見て、頭で考えていたよりも、また一段と親しみの湧いて来るのを禁じ得なかった。

周囲一六kmの島、四百人程の島民、所帯数百十戸、百台足らずの車、一つの信号機も無い島“小浜島”……高層のホテルが海に迫り、空にはゼット飛行機が舞いあがる石垣港から、快速艇でわずか三十分程のこの地に、この様な別天地が存在するのかと、自然の偉大さと、築き上げた歴史、その地に住む人々の郷土愛を、ひしひしと私は感じさせられていた。

この地の特産であるサトウキビの畑の中をマイクロバスは、この島最高の高さである大岳（九十九m）に向かっていた。頂上まではバスは行けず、途中よりやや急な階段を昇る事になる。幸い女坂と言うか、なだらかな道が用意されており、年を取り始めた我々の足でも、登り易く用意されていた。

ブーゲンビルヤの赤い花が緑の葉っぱの中に浮かび上がり、また白や黄色の蝶が十羽程舞ながら我々を歓迎してくれていたのは、冬は寒いもの、蝶等は全然記憶外のものではあった私を喜ばせ驚かせた事で、華やかな自然の歓迎レセプションであった。男坂、女坂が合流し、路の両側を覆っていた樹木が途切れると、突然眼下に百八十度の視野をはるかに越す美しいエメラルド色の海岸が現れていた。

大岳山の頂上である。小さな円形のこの島を守る様に、海岸線から少し離れて存在するリーフ、それに乗り上げ、白線となって揺れる白波、サンゴ礁で出来ている島特有の美しさである。汚れを知らない澄みわたった空、澄んだ空気、物音一つしない空間に、私は一時を惜しむ様に過ごしていた。

雄大な西表島をバックに、優雅に泳ぐマンタの見られると言う通称「ヨナラ水道」が、エメラルド色の海を割って青い一本の細い線を引いていた。自然そのままの美しい海、日本にもこんな樂園があったのかと、改めて思わざるを得なかった！

美しい八重山諸島の風貌に、耐え難い別れを惜しみながらも、バスは先程見下ろしていた西表島を真っ正面にした、東畑崎海岸に着いていた。

マンタの泳いでいるという「ヨナラ水道」は目の前である。海の深さを思わせる澄んだ青い線が、西表島と小浜島を明確に分離する様に横たわっていた。

バスは貝拾いをする我々の為に、少しの時間を裂いてくれた。サンゴから出来ている白砂、その中に綺麗な模様をあしらった巻き貝、サンゴ虫のアバートであった丸い穴の明いたサンゴ、我々には珍しく、持つて帰りたい物で一杯である。でもサンゴの石と言っても土産には重すぎる代物である。このサンゴの浜の奇麗

な海の中には、熱帯魚の様な美しい魚が、群れをなしながら泳いでいるであろうとの思いと合わせ、私の心の貴重な土産物として、バスの上の人となった。

バスはやがてこの島唯一の施設であろう、リゾート施設「はいむるぶし」に着く。「はいむるぶし」とは南十字星を意味しており、この島から南十字星が地平線のかたにに見える事であろう。放し飼いにされている孔雀が2羽、悠々と我々のそばによって来たり、池の中には睡蓮の花の間をアヒルが群れをなして泳いでいた。東経百二十三度五十九分二十九秒、北緯二十四度一九分四十秒と日時計には記されていた。【小浜島】俗化されないで奇麗に整えられた島、という印象を強く持たせてくれた島である。島の人々とは、運転手以外話す機会が無かったが、この美しい自然に育てられた人々は、きつと明るく、美しい心の持ち主であろうと思われる。沖縄の《美しく》を表す放言『ちゅらさん』如く、人々の優しく美しい心の現れを、巧みに表現してもらえるものと期待している。

もう一度ぜひ訪れたい島【小浜島】ではある。

降船時、女性乗組員の『足元にご注意を』の声で私の小浜島探索は終わっていた。

：  
蝶の舞う 小浜ヶ島の 冬便り  
：



## 後書き。

歳をとると一年が早いと言われますが、古希から喜寿までの七年間、私にとっては本当に早さを実感した年月でした。その間で母を亡くした事もあったからかも知れませんが。ようやく心静かに今日を迎えられる様になって、改めて年月の早さに心とまる様になりました。その間の心に残る思いを書き留めたものを引き出して見て、私の二度と無い歳月を残したいと思いました。

元より人様にお見せするもので無いかも知れませんが、同じ年月それぞれの方々がその立場で過ごされた年月、私は私なりに感じた事を書き留めたものです。ドイツの詩人ゲーテが『人間は、何を滑稽だと思ふかによって、何よりもよくその性格を示す』と言う言葉を残していますが、日々感じたものを私なりに残しておきたかったです。お暇をとらせ、お読み戴けた事を幸せに思うものです。尚挿絵は城所宴さん、俳句は家内がそれぞれ貧しい文章を補い、本の出版については子供達が協力してくれたた事を心から感謝致します。

平成一三年五月一六日

城 所 進

# チームメイト

商品企画チーム 顧問 城 所 進



T 13. 5. 16 O型 牡牛座

- Q. 出身地  
【東京都】
- Q. 何人家族ですか。  
【妻、2男1女】
- Q. 子供の頃はどんな子供でしたか。  
【木登りの好きな子】  
庭に杉の木が3本あり、登って雲の流れを眺めていました。
- Q. 憧れていたもの、なりたかったものは何ですか。  
【医者、エンジニア】

戦後の混乱期、自分たちで何かを作らなければと思いました。

Q. 趣味は何ですか。

【文芸】

読む方も、書く方もします。

Q. 尊敬している人はいますか。

【中 坊 公 平・・・自分に素直で率直、飾らないところ

日野原重明・・・聖路加看護大学名誉学長】

Q. 一番大切にしているのは何ですか

【愛は己の利を求めず】

自分の利が少しでも入っているものは、本当の愛ではありません。

Q. 今後の目標はありますか。

仕事では・・・

【機能追求の製品開発】

プライベートでは・・・

【パソコンの勉強】

【自分の感じたことを素直に書くこと】

Q. 好きな言葉は何ですか。

【和をもって尊しとなす】

自分が偉いとか、他人が愚かと言う見方はありません、人は皆同じです。

《インタビューを終えて》

お話をしている間、終始にこやかで温かい人柄がにじみ出ていました。本当の愛は、難しいけれど城所顧問には愛がありますね。

ビヨンスルク社内報より

(平成13年3月7日発行)